



午前零時の靖國神社社頭



靖國神社奉納大絵馬

報 特 攻  
 平成20年2月  
 会

第74号

財団法人 特攻隊戦没者 慰霊平和祈年協会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 3-6-8第6森ビル

電話 03 (3432) 1090  
FAX 03 (3432) 5567

http://www.tokkotai.or.jp  
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能  
発行人 栗原宏  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社年越し詣で……………12  
 平成20年 年頭のご挨拶……………10  
 皇居参賀二題……………9  
 第三世代の一人として……………7  
 伝えていきたい特攻の真実……………5  
 平成19年度回天烈士及び戦没回天搭戦潜水艦乗組員追悼式……………3  
 海軍甲良基地出撃戦没者……………3  
 特攻隊で死んだ夫……………3  
 遺族からの聴き取り……………3

12 10 9 7 5 3 3 1  
 女高生の手紙を抱いて敵艦に体当たり攻撃した堀元官一命の実状判明・第二報(まとめ)……………14  
 コミンテルンの昭和史への介入度は如何に……………15  
 終戦二日前の特攻……………15  
 藤田重喜伍長(特幹1期)……………15  
 碑は語る特攻隊⑤……………15  
 高千穂降下部隊の忘れ難い人々……………15  
 宮崎特攻基地慰霊祭……………15  
 明野忠魂塔慰霊祭+加藤隼戦闘隊長の木像62年振り奈良から里帰り……………15  
 神風特別攻撃隊敷島隊員……………15  
 谷暢夫飛曹の思い出……………15  
 「俺は、君のためにこそ死にに行く」を見て……………15  
 川南護国神社例祭参加……………15  
 第40回豫科練戦没者慰霊祭……………15  
 平成19年度フイリピン慰霊巡拝旅行所見……………15  
 秋水の試験飛行成らず……………15  
 図書紹介・フイリピン少年が見たカミカゼ・幼い心に刻まれた優しい日本人たち……………15  
 「特攻勇士之像」(第三体目)……………15  
 宮城縣護国神社に奉納……………15  
 お知らせ……………15  
 平成19年度第2回理事會・評議員會報告(平成19年12月6日開催)……………15  
 事務局からの報告等……………15

靖國神社年越し詣で

今年で連続3回目の靖國神社年越し詣である。筆者にとって今年はまだ格別の感懐のある年越し詣である。年が明ければ直ぐに八十の坂を越える

ことになる、つまり、傘寿を迎えることになるからである。今年には八の重なる年でもある。西暦二〇〇八年、八の字にあやかっ、末広がりの年になれと期待を込める向きも多い。中国では、ラッキー・エイト

にあやかっ、〇八年八月八日八時、北京オリンピックが開幕となる。だがそれは、お祭り気分を高揚させるための数字合わせに過ぎない。そもそも、八十歳を寿齢として貴ぶのは、「優老賜杖」の慣わしからきている。古く中国の周代より伝えられており、八十歳に達すれば、宮中において杖を許されると『礼記卷四』にも記録されている。我が国における賜杖の慣わしは、文武天皇4年、時の左大臣多治比真人島が、その功績と高齢を優遇されるに当たり、帝より鳩杖を賜ったと『続日本紀』に記録されており、正倉院御物の中にも残されている。その伝統は、江戸時代から明治以降にも受け継がれ、昭和に入ってから、西園寺公望公に始まり、5人目の吉田茂元総理に賜ったのが昭和40年とのことである。「鳩に三枝の礼あり、鳥に反哺の孝あり」と言われるように、礼を重んじ、孝養を尽くすべきことの譬え

事務所移転のお知らせ

当協会の事務所は、来る4月7日左記へ移転します。

記

〒105-0001 4

東京都港区芝2-5-19

ATビル 4階

(詳細は51頁を参照して下さい。)

から、鳩杖は、深い敬老の念を表しているのである。この意味で傘寿は杖寿とも言われるのである。

前置きが長くなったが、靖國神社の年越し参りには、他社では決して味わうことのできない感動的情景に出会うことができるのである。

巨人の如く漆黒の空に聳え立つ大鳥居をくぐれば、参道中央、遙か東北の空を睨んで立つ大村益次郎像迎りから第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこの有名社寺でも見受けられる年越し参りの景観



神門開扉前



午後11時30分神門開扉開始 手前はボーイスカウトの庭燎奉仕



全国神社奉納絵馬展

をなしている。

正零時、暗夜の静寂を破って大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとーございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、拍手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達を中心としながらも、真摯な参詣人の姿がそこにある。

新年祝賀の拝殿掲示の明治天皇御製は「あしはらの 国のさかえを 祈るかな 神代ながらの 年をむかへて」(明治三十七年)である。殊更身の引き締まる思いがする。

毎年のことながら、靖國の社頭には

伊勢絵馬協賛会の安田織人氏から献上

された大絵馬が掲げられている。今年  
は戊子年、干支の子に因んで可愛らしい二匹の鼠と打ち出の小槌が描かれている。また、その横には、全国約三百三十社から奉納された絵馬が美しく飾られている。その中に郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。靖國神社に寄せる、護国神社を始めとする全国の神社及び善良な国民の崇敬心の篤さを思わせる。更に、境内各所での、ボーイスカウト東京連盟の大勢の少年達による庭燎(かがり火)奉仕の健気な姿に感動。神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で元旦特別上映の映画「明治大帝と乃木將軍」の初回を観賞し、乃木大將を始め祖国の危機に身を擲って敢闘した祖父らの姿を偲び、武人の鑑たる大將の誠実な人柄と大御心の忝さに改めて感動。深夜の館内は若者達に溢れ、熱心に遺品や遺書など展示の品々に見入っており、戦争を中心とする我が国の近・現代史の真実が徐々に浸透している証とも見え、いささか安堵と希望を覚えた次第。今年も清々しい気持ちで社頭を拝辞した。

(飯田正能記)

# 平成20年 年頭のご挨拶

会長 山本 卓眞



会員の皆様には、よい新年をお迎えることとお慶び申し上げます。

米国はイラクはじめ中東に勢力を取られ、アジア戦略にも影響が出始めたように見えます。東アジアでは、ロシアが「力の国際政治」色を強め、朝鮮半島は予断を許さず、中国は軍事力増強を続け、日本との軍事バランスが逆転するのも、そう遠くないと見られています。東シナ海での領海侵犯、ガス田での恫喝的発言など、日本、台湾周辺には危機が近づいています。遺憾ながら我が国は、60年の太平に馴れて、迫り来る危機を真

剣に考えようともしない状態です。

昨年9月、安倍首相が退陣し、激しい批判を浴びましたが、1年の在任中に、教育基本法、防衛庁を防衛省に昇格、国民投票法を成立させるといふ偉業を成し遂げました。後継首相は、靖國神社に参拝せずと言明し、中国に迎合する発言をして国民の眉を顰めさせました。護国の英霊を蔑ろにするようでは、国民精神即ち国防の基本が危ういと言わねばなりません。

安倍首相の掲げた「戦後レジームからの脱却」の理念と実行力は、我が国の国家像を正常化する方向であり、憲法改正も加速されるかとの期待もされただけに真に残念に思います。しかし、戦後レジームからの脱却とは、占領政策からの脱却をも意味しており、国内ばかりでなく、外、特にアメリカの反発も予想されるだけに、この停滞期を反発緩和期、次のステップへの準備期と前向きに考えたいと思います。

7月の参議院選挙でマスメディアの大半は安倍内閣の引きずり降ろしを図

り、論点を目先の問題に引き下げて庶民に民主党の生活重視政策を選択させるのに成功しました。日本は暫く内政でも逆行時代でしょうが、国民は政府を監視激励する必要があります。同時に、反日的なマスコミには、不買運動などで報復すべだと思えます。

昨年の夏は、かなりの酷暑で高齢の先輩方が鬼籍に入られました。9月になくなられた名誉会長瀬島龍三氏もその一人で、当財団法人の設立をはじめとして、晩年の熱心な慰霊事業に敬意を表し、ご冥福をお祈り致します。また、昨年は支那事変70周年に当たり、日本を犯罪国家として定着させるべく、中国系の捏造映画が多数計画されていると報道されています。他方、日本の真摯な学者の研究により、所謂「南京大虐殺」は中国の悪宣伝であることが証明されています。また、冷戦終了以来、旧ソ連から秘密資料が次々に公開され始め、例えば、満洲事変の発端である張作霖爆殺事件すらもコミンテルンの工作だったという資料が出

て、歴史の見直しが始まっています。先人の謂れなき汚名を雪ぐのは、英霊の慰霊でもあり、国家の名誉、尊厳にも関わる大事であります。当協会ができることは余りないとは思いますが、会員の皆様には、近現代史を新しい観点から見直し、特に大東亜戦争によってアジア、アフリカを独立に導いた、即ち20世紀のパラダイムを転換させた英霊と先人の偉業を誇りにして頂きたいと思えます。

当協会の会員は、一昨年の三百人の減少に加え、昨年約四百人減少し、会員数は、三千名弱となりました。御遺族、戦友の高齢化に伴う止むを得ないことではありますが、特攻戦士の慰霊顕彰をできるだけ盛大に続け、次世代の方々への、精神と事業両面の継承を確かなものとするために、会員の増強、特に若い方々の入会を切に望みます。会員の皆様のご協力をお願い致します。

## 皇居参賀二題

暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2

日の一般参賀である。いずれも好天に恵まれて前年よりも多くの人々が訪れた。

天皇陛下は宮内庁を通じて新年を迎

える御感想を発表され、昨年、石川・新潟両県で起きた地震に触れられて「被災者の苦勞が察せられます」と氣遣われる一方、「国民生活に不安をも

たらず社会的状況が幾つか明らかになったことは残念」と振り返られ、「新しい年が国民にとって幸せなものであり、世界の人々が互いに信頼し

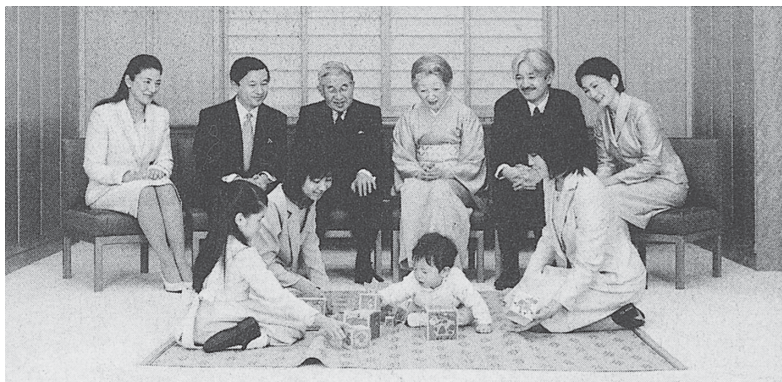
合って暮らしていける社会が築かれていくことを願っています」と、深い御軫念を示された。

両陛下が昨年詠まれた御歌

(宮内庁発表)

天皇陛下 (5首中3首)

〈リンネ生誕三百年にあたりウプサラを訪ふ〉



皇居・御所の応接室にお揃いの天皇御一家 (宮内庁提供)

二名法作りしリンネしのびつつス  
ウエーデンの君とここに来たりつ  
〈ラトビア占領博物館〉

シベリアの凍てつく土地にとらはれ  
し我が軍人もかく過ごしけむ

〈新潟中越沖地震〉

被災せし新潟の人はいかにあらむ暑  
さ厳しきこの夏の日に

皇后陛下 (3首中2首)

〈玄海島〉

洋中の小さき陸よ四百余の人いま住  
むを思いつつ去る

〈滋賀県「豊かな海づくり大会」〉

手渡しし葭の苗東若人の腕に抱かれ  
湖渡りゆく

○天皇誕生日参賀

平成19年12月23日(日)、夜来の激しい冷雨に参賀の足も遠のくかと思われたが、明け方から小雨に変わった。それでも寒気厳しく、小雨の中、早めに家を出たところ、皇居前広場に着的な頃には雨も上がり、思いの外大勢の人々が検問所目指して歩いて行く姿にほっとした。二重橋を渡ったあたりから薄日さえ差す絶好の日和となった。宮殿長和殿前の広場は早くも日の丸の小旗を手に参集した数千の人々で埋まった。圧倒的に若者が多い。外国人の姿も多く見受けられる。暫く待つ

ちに、空は見る見る青く澄み渡り、正に天皇日和となったから不思議だ。

やがて11時10分頃、天皇・皇后両陛下、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮殿下

の五方が長和殿ベランダに出御されると、一斉に日の丸の小旗が振られ、あちこちで「天皇陛下万歳」の声が上が

る。つられて筆者の側にいた米人の若い姉妹が「ワンダフル!ハッピーバース

デー」と叫ぶ。皆晴れ晴れとした顔をしてい

る。頃合いを見て天皇陛下からお言葉を賜った。「寒い中を大勢の

皆が共に祝ってくれてありがとう」と

参賀の人々をねぎらわれ、「新しい年に向けて皆が健康で幸せの多い年となるよう祈ります」と仰せられた。ひと

しきり万歳の声が上が

り、小旗が打ち振られ、それに手を振ってお応えになられる皇族方の御姿に清々しさと幸せを感じた一時であった。

ところで、天皇誕生日が12月23日というクリスマス

の直前であるためか、マスクも大きくは取り上げず、一方クリスマス商戦がらみで、派手なイルミネーションのツリーが飾り立てられており、このところ年々競(狂)演が

激しくなっている。東京都までが後援

して、皇居近くの日比谷公園に日本一という42メートルの鉄塔のクリスマスツリーを建て、イルミネーションで飾

り立てる愚を敢えて現出している。そのような人工の美よりは、皇居の常磐の松に囲まれた自然と、多くの人々の奉仕によって美しく整えられた庭園の美こそ、人々の心に清々しさと安らぎを与えてくれるのである。日本人以上に外国人がそのことに気付いてくれているのではないかと感じさせられた今日の参賀であった。



参賀者に手を振られる天皇・皇后両陛下、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、雪国の人々には申し訳ないような気持ちさえする、一点の曇もない日本晴

れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日でもあって、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をした後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入り、鉄橋(二重橋)を渡って宮殿長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約30分、検問所から正門石橋前まで約30分、そこから更に広場まで約30分と約1時間半を要したため、第1回の御出御に間に合わず、11時頃の第2回の御出御を待つこと約30分、辛抱の2時間であった。

およそ2万人を収容できるという長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々が圧倒的に多く、華やかな気分になっている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。かつて昭和30年代頃には、数十名の芸者衆が着飾って団体で参賀に訪れ、目を瞠つたこともあったが、今や和服姿のほとんど見当たらないのは、少し寂しい思

いがする。やがて11時、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下、常陸宮・同妃両殿下、三笠宮・同妃両殿下、高殿宮妃殿下の

十一方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上ががり、両陛下と皇族方が手を振ってこれに応えられた。

天皇陛下は「新しい年を共に祝うことを嬉しく思います。年頭に当たり、国民の幸せと世界の平安を祈ります」とお言葉を賜った。身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで広場を去り、富士見櫓、旧百人番所を経て本丸入口から東御苑に入れば、ここも塵一つ、落ち葉一つ無く綺麗に掃き清められ、一層清々しい気持ちにさせられる。平成2年11月23日、24日に、この広場に造営された大嘗宮において斎行された大嘗祭の盛事を偲びつつ、傍らの

休憩所に入ると、そこに大嘗宮の模型が飾られていた。思えば、今年が平成も20年、1月8日で御即位満19年を迎える。昭和が始まって終戦までの20年とほぼ同じ歳月が過ぎ去ったことになる。昨年10月6日に東京ビッグサイトで開催された日本会議設立10周年記念大会で決議され

た大会宣言文の中にも「我々は、明年、天皇陛下御即位二十年の佳き年を迎えるにあたり、わが民族統合の中心である皇室の彌栄を祈念し、全国津々浦々で盛大な奉祝行事を行う」とある。是非実現したいものである。そして、伝統と誇りある国づくりへ国民の力を結集したいものである。(飯田正能記)



伝えていきたい特攻の真実

会員 内場 裕子

「注・映画『俺は、君のためにこそ死にいく』のヒロイン、特攻の母と慕われた鳥濱トメさんの次女で、映画

の中では知覧高女「なでしこ隊」の一員として三角兵舎に通い、特攻隊員達の世話に励んだ赤羽（旧姓鳥濱）礼子さん（故人）が経営していた新宿の郷土料理店「薩摩おごじょ」の現経営者赤羽潤さん（トメさんの孫に当たる）が、平成19年9月23日、世田谷観音寺

での第56回特攻平和観音年次法要に参列された機縁で、当協会事務局の大澤清職員が「薩摩おごじょ」を訪れた際、赤羽さんの紹介で、偶々居合わせた内場さんに当協会の話をして入会を勧誘したところ、早速、入会手続をして下さり、後日、次のような心のこもった

有り難いお便りを頂戴した。ご本人のご承諾を得て掲載させて頂いた。」  
◇ ◇ ◇  
先日、薩摩おごじょで、赤羽さんに大澤様をご紹介いただき、名刺をいただきました内場と申します。さっそくホームページの入力画面から入会の申

し込みをし、先週振込みを完了しましたので、連絡します。

これから、特攻の事実を風化させないように伝えていけるよう、私も一緒に頑張っていきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

私の祖父は、少年飛行兵でした。出撃前に終戦になったので、今の私がいるわけですが、これまで祖父が特攻に志願したという話は、母から聞いてはいましたが、余り気にも留めずに生きてきてしまいました。しかし、石原慎太郎氏の製作にかかる映画『俺は、君のためにこそ 死ににいく』やリサ・モリモト氏の『TOKKO』を観て、祖父のことが知りたくなり、勇気を出して話を聞かせてくれるように頼みました。

無口な祖父が、自分が書いた遺書や国旗の寄せ書きを見せながら話してくれた内容には、驚くことが沢山ありました。私は特攻隊員達を心から尊敬すると同時に、特攻の真実や真心を何としても伝えていきたいと思うようになりました。

絶望的な戦局の中で、敵軍に本土上陸をされたら、郷土は焼き尽くされ、愛する者は殺され、犯され、奴隷と化す、そう考えた末、最早この方法しかないと思われたのであって、洗脳され

ていたわけでも、自分を失っていたわけでもない。「私心」と「公心」との激しい葛藤の中で、想像を絶する思いで「私心」を制御し、公に殉じる決断をした特攻隊の方々のことを思うと、何も知らずに当たり前のように平和を享受して育ってきたことも、何もかも申し訳ないと思います。

壮絶な負け戦の中で、光り輝くものがあつたとしたら、陸に海に散華した将兵達の闘争心と真心だつたと思えます。命よりも尊い価値があると信じて太平洋に散つた特攻隊の方々が残していつてくれたことを伝えていきたいと思えます。私のライフワークとして。

今も、特攻にまつわる本を読み続けていますが、著者のフィルターがかかっている、ピンとこないところも多く、体験された方々の生のお話を聞きたいと強く思っています。どうか、お力をお貸し下さい。いつかそれを、子供達と祖父達を繋ぐ本にしたいと思っています。

平成19年10月10日

内場 裕子

赤羽潤さんが経営する新宿の郷土料理店「薩摩おごじょ」について、平成18年8月、某新聞に次のような記事が掲載されているので、その一部を紹介

する。

「あの味と記憶を後世に残したい」。戦争末期、激しい対空砲火を浴びながら敵艦船に突入、散華した特別攻撃隊員達の姿を語るため、今夜も店に立つ男性がいる。赤羽潤さん39歳、特攻基地のあつた鹿児島県知覧町で、「特攻の母」と慕われた故鳥濱トメさんの孫だ。「戦争を繰り返さないためにも、聞かされた悲劇を語り継ぎたい」と力を込める。

トメさんの二女で、昨年75歳で亡くなった赤羽礼子さんの二男として、昭和42年3月同町で誕生。その後4歳まで東京で過ごした後、トメさんらの元で育てられた。

戦時中、トメさんは知覧町で軍指定の食堂を切り盛りした。「富屋食堂」である。特攻隊員の思い出話を子守歌のように聞いて育つた潤さんは、そんな自分をおばあちゃん子と言う。地元高校を卒業して上京。調理師学校で学んだ。

当時、礼子さんは、トメさんの後押しで、生き残つた元隊員達が気軽に足を運べる郷土料理店「薩摩おごじょ」を新宿で経営。潤さんも通いつめて、母から味を教わつた。トメさんが特攻隊員に出した料理の味を忠実に引き継いだ。



郷土料理店「薩摩おごじょ」  
〒160-0022  
東京都新宿区新宿3-10-3  
TEL03-3354-9394

礼子さんが体調に異変を感じたのは、昨年春のこと。それでも反対を押し切つて店に立ち続け、見聞きした隊員の姿を語り続けた。8月に入院し、診断の結果は腎臓癌、肺に転移し、手遅れの状態だつた。

出撃前夜の食事や会話、笑顔で飛び立つ若者……。特攻兵舎で隊員の身の周りの世話をしたこともある礼子さんは、10月中旬の死の直前まで、見舞いに来る潤さんに、記憶を手練り、必死に語り掛けた。

そんな母の姿を見て決意した。「店は継ぐから安心して」と言つた。礼子さんは「嬉しい」と涙を流した。息を引き取つたのはその2日後であつた。「最初で最後の親孝行だつたかな」と潤さんは言う。



鹿児島市の飲食店勤めを辞め、11月から店を始めた。「祖母の味をずっと守っていく」と潤さんは言う。隊員が当時口にした、さつま揚げやとんこつと笑う。

平成19年度

回天烈士及び戦没回天搭載

潜水艦乗組員追悼式

評議員 河崎 春美

平成19年11月11日、11時30分より表記追悼式が、「回天顕彰会」の主催で行われ、地元諸関係団体、山口県、周南市、光市、平生町及び各議会関係者、呉地方総監部ほか岩国、防府等駐屯各部隊代表者が参列され、御遺族三十余名の御出席の下、総勢約三百名に及ぶ盛会であった。

例年のとおり、式典中に、空自防府基地・海自小月教育航空群・海自岩国基地からの航空機による編隊慰霊飛行が行われ、また、合唱団による懐かしい曲目の合唱があり、更にこの日のために、地元の作詞家と作曲家によって作られた『回天鎮魂の詩』が十数名の合吟により奉納された。そして、最後の締め括りには、例年通り、大徳山太鼓「回天」が奉納された。

今回で五回目となる「回天を知る会」

煮といった郷土料理が世代を超えてよみがえる。客には元隊員も多い。「中には母と僕を重ね合わせる人もいる」と笑う。

「戦争は二度と繰り返してはいけな」と、生前のトメさんの口癖だった。「自分にできるのは、引き継いだあの味と記憶を後世に伝えること」と、終

が、前日の行事として、大津島小学校横のコミュニティハウスにおいて行われ、生き残りの回天搭乗員三名が、参加者の質問に答えて、訓練時や出撃時の心境等について説明をし、十数名の参加者はそれぞれに心打たれていた。

『回天鎮魂の詞』

作詞 小林 勝

一節 別離

波静かなる瀬戸の海  
あ、父母よ妹よ  
さらば祖国よ戦友よ  
征きて還らぬ殉国の  
別れを告げる夜半の月

二節 発進

怒濤逆巻け地もゆるげ  
頭に結ぶ鉢巻きの  
白さ目にしむ月明り  
口一文字に眉あげて  
今回天は発進す

三節 爆沈

あとに残れる航跡の  
淡きは己が運命なり  
身をもて当たる爆沈の  
凱歌を知るに由なくも

特攻の華莞爾たり

四節 魂 魄

残る心はこの遺書に  
震天動地特攻の  
魚雷となりて散りし時  
われ悠久に生くるなり  
勇士は征きて還らざり



大津島・回天碑前追悼式



大徳山太鼓「回天」奉納



「回天をもっと知りたい会」参加者

## 海軍申良基地出撃戦没者

### ○申良追悼式

予学13期 内田 太郎  
平成19年度の申良基地出撃戦没者追悼式は、10月15日(月)、折しも秋晴れの青空の下、御遺族44名(北海道を始め全国各地から)を含む約300名の参列者が、慰霊塔の前に集まって執り行われた。

申良町では、同基地から出撃して散華した若い勇士達の魂を鎮め、永久にその功を讃え、平和を守るための礎石として後世に伝えるため、昭和44年、同基地の滑走路跡に慰霊塔を建立し、以来毎年追悼式を行ってきた。申良町は昨年、鹿屋市と合併したが、市では引き続き追悼式を行っている。

慰霊塔の台座には、戦没者の氏名が、所属隊名を付して刻まれているが、参列した御遺族は、刻まれた親族の名前を見付けては「会いに来たよ」と告げ、あたかも頭を撫でるかのように、刻名を手でさすって、靈魂の安らかならんとことを祈っておられた。

御遺族は年々歳を取り、参列者が減っているのは、いずこも同じであるが、娘や孫、甥、姪など若い人達が見

えているのは心強い。また、地元の各種団体の代表者が多数見えていたのも、この地の慰霊祭の特色であろう。近くに、航空自衛隊の基地があるので、追悼式の実施については、当初から自衛隊の協力があり、今年も、第一航空群司令が追悼の言葉を捧げた他、ラッパの吹奏、追悼飛行(ヘリコプター、P3C)、儀杖隊弔銃等が行われた。

また、国旗、市旗と共に軍艦旗が掲揚され、地元消防隊音楽隊の伴奏により国歌を斉唱し、前記第一航空群司令のほか市議会議長、地元雄飛会会長が追悼の言葉を捧げた後、御遺族、戦友、来賓の順に献花が行われた。

次いで、戦死者の遺書の朗読では、地元甲飛13期中藤氏が、特攻で散華した弥永光男二飛曹(甲飛12期)及び須賀芳宗少尉(予備学生14期)の遺書(手紙)を披露した。

最後に、御遺族を代表して、八幡神忠隊大石政則少尉(予備学生14期)の弟さんが、事故で失明した身を支えられて碑前に登場、兄上の思い出、特攻への心情、手で兄上の刻名をなぞった時に付いた埃の感触等について語られた後、一同、碑前に深く英霊の冥福を祈り、来年の再会を約して、閉式となった。

(追記・この地は、艦攻隊の発進基地だったのに、慰霊塔には一部艦爆隊員

の氏名が刻まれている。近くの国分基地跡の慰霊碑にも同じ氏名が刻まれているので、将来どちらが正しいのか迷うことになるかも知れない。)

### ○申良出撃の特攻隊

予学13期 内田 太郎  
〈申良基地〉

申良基地からの特攻出撃は、菊水一号作戦開始の昭和20年4月6日から菊水十号作戦の終了後も引き続き、6月25日の徳島第五白菊隊の出撃をもって終止符を打った。

この基地は、鹿児島県大隅半島の中央部にあり、昭和19年4月整備員養成を目的に開隊した。20年1月再編成の攻撃二五六飛行隊が訓練基地として使用することになり、艦上攻撃機天山数が配備され、先ず離着陸訓練から始まった。その後岡崎から新品の天山が補給され、私も偵察員として都井岬を起点とした洋上航法、志布志湾の枇杷島を目標にした雷撃発射訓練に精を出した。

戦局が厳しくなつて、2月20日、攻撃二五六飛行隊は、千葉県香取基地へ後退して訓練を重ねることになり、代わって錬度の高い攻撃二五一飛行隊が香取からここへ進出してきた。

3月に入つて、潜水艦哨戒の出撃が行われ、下旬には未帰還機も出てくるようになった。

#### 〈菊水作戦〉

菊水一号作戦開始に当たっては、第三航空艦隊一三一航空隊司令の浜田大佐が香取基地からこの地に乗り込んできて総指揮を執り、搭乗員は、攻二五一・攻二五四・攻二五六飛行隊、二一〇航空隊、宇佐航空隊、姫路航空隊、百里原航空隊から訓練済みの勇士が集結した。また、爆弾装備の特攻隊だけでなく、魚雷装備の雷撃隊も展開した。

菊水四号作戦からは、第五航空艦隊九三一航空隊司令の中村大佐が指揮を執り、菊水七号作戦以降は、実用機の特攻使用はなくなり、偵察用練習機の白菊を動員する状態になった。

特攻出撃総数は、157機で、その内49機は、エンジン不調などで引き返しているが、白菊の場合は、54機出撃して、半数近くの25機が引き返している。そのほか、列線に並んでエンジンをかけたが不良のため、発進を取り止めた機も、それぞれの隊で一〜二機はあった。

特攻に使用している機材がいかに粗末であったかを物語っていると見えよう。その中であっても、多くの機は、

不調のエンジンを何とか操って目的地へ向かって行った。途中、敵戦闘機の攻撃を受けて、無念にも目的地へ到達できなかった機もあった。すべての機に電信機が搭載されていたわけではないので、その辺のことは定かではないが、多くは「敵艦に突入」の電信の後、長符を打ち、体当たりしたと推定されているが、戦果は誰も見取っていないので、不明の点が多い。

#### 〈布告されなかつた友〉

この基地から特攻隊として出撃し、散華したのに、特攻として布告されていない人が7名もいるのは驚いた。その一つは、20年4月16日、天塚隊第3小隊2番機として九七式艦攻で6時42分申良発進、敵戦艦に突入と推定されている経塚機である。当日天塚隊は、9機発進し、うち1機は枕崎に不時着して搭乗員重傷、1機はエンジン不調で引き返している。残り7機は、沖繩近海で敵戦艦に突入、散華している。しかるに、経塚司郎少尉、伊藤正士一飛曹、松本伝三郎一飛曹のペアだけが特攻布告から外れ、他の6機と別の1機が布告されている。その1機とは、同日夕刻17時頃、雷撃隊5機が申良を発進、沖繩に向かっているが、その中の1機で、未帰還になって特攻に名を連ねていることが判明した。

このことは、昨年の申良追悼式の折、遺族の海田さんから「九三一空の戦闘詳報が見付かりました。それによると内田さんと同期（予備学生13期）の経塚さんは、特攻出撃だったんですよ」と言われて初めて知った。（この戦闘詳報は、他の隊の戦闘詳報の中に入っていた。）特攻と雷撃、早朝と夕刻の違いがあるのに、何処でどう間違えたのか不明だが、誠にお粗末と言わざるを得ない。

御遺族（父母、兄弟）は、何も知らないまま他界されている。電信員松本伝三郎氏の出身母体甲飛会では特攻に扱っていて、『青春の遺書―予科練戦没者の手記―』（毎日新聞社編）に遺書載せている。

「父上、母上様

いよいよ出撃致します。今までの不幸何卒お許し下さい。

この手紙が届く頃は、立派に戦っておりです。これが最後の手紙になることでしょうか。今大急ぎで書いております。

先便にて私の胸中は・・・  
何卒皆様様、お元気で暮らして下さい。神かけてお祈り致します。

立派に戦い死ぬ決心です。一言、でかしたとほめて下さい。  
飛行機はペラを回しております。も

う搭乗員整列です。元気で頑張ります。

皆様によろしく。乱筆にて御免。」

もう一つは、姫路空の第二護皇白鷺隊の椎根茂二飛曹、宮本智也候補生、富樫幸雄二飛曹機で他の3機と共に申良を離陸、約1時間後「エンジン不調引き返す」と打電したまま消息を絶った。そして、布告されなかった。同じ日、宇佐空の第二八幡護皇隊の1機もエンジン不調を打電し、未帰還となったが、自爆として布告されている。

現場の飛行隊長・飛行長の判断によって、聯合艦隊への申請が行われたのであろうが、一度爆装をして基地を飛び立てば、十死零生の境遇であり、たとえ基地周辺で自爆しても他の隊員と同じであろう。

徳島第五白菊隊の谷川喜之中尉機の場合、エンジン不調で奄美大島西方の宝島付近に不時着し、偵察員は脱出して助かったが、操縦員は機と共に海に没した。この偵察員は、自分の報告の仕方が悪かったため、戦友が布告されなかったのではないかと、一生負い目を感じていると告白している。

それに比べ、徳島第三白菊隊の山岸純二飛曹は、鹿児島西方の硫黄島近海に不時着し、偵察員は助かって帰還、操縦員のみ特攻として布告されてい

る。

これらの事実を特攻協会に報告したところ、同協会編『特別攻撃隊』改訂五版（注）で、特攻戦没者名簿の該当箇所を追記されることになり、生き残った者として、戦死者に対する、せめてもの供養をしたことになるのではないかと思っている。海中に眠る英霊も安堵して休んでほしい。

私が再度この基地に着任したのは、20年5月末で、菊水九・十号作戦に、雷撃隊として沖繩沖に出撃したが、基地で直接特攻機を見送ることはなかった。

#### 〈隊員の内訳〉

隊員の内訳を見ると、若い二飛曹（主として甲飛12期・乙飛18期）が全体の34%を占め、断然多い。宇佐空の第二及び第三八幡護皇隊・神忠隊、姫路空の第二及び第三白鷺隊、百里空の皇花隊は、電信員全員が二飛曹である。20年5月以降は、進級したので、一飛曹が多くなっている。

一方、士官は、予備学生出身の少尉が、全体の27%を占めているが、宇佐空は、分隊長クラスの大尉が3名（内海兵出身2名）、中尉は6名（内海兵出身4名）を出している。白菊隊になると、士官の方が下士官の2倍になっている。

一度出撃エンジン不調などで引き返

したのは42名、三度出撃したのは5名、中には4度出撃した人も1名いる。

散華した友の冥福を祈る。  
 (注・本号で、協会からの報告事項に示されているが、『特別攻撃隊』の改訂五版は、新たに準特攻戦没者の名簿を加えて、近く刊行される『特別攻撃隊全史』の第一部として収載されることになる。)

## 特攻隊で死んだ夫 — 遺族からの聴き取り —

「本稿は、愛知県半田市で編纂した『続・半田の戦争記録・2006年』に収録された、大岩虎吉海軍少尉(飛行予備学生13期)の遺族・妻たねさん(大正11年生まれ)から半田市の記録編集担当者が平成8年10月、聴き取り調査をして編集したものである。

大岩虎吉少尉は、大正8年生まれ、昭和18年9月、中央大学法学部を繰り上げ卒業、学徒出陣により第13期海軍飛行予備学生として入隊、昭和20年4月の菊水一号作戦に参加、第一護皇白鷺隊の一員として、4月6日、97式艦攻で申良基地から出撃、沖縄周辺の敵艦船に突入、戦死された。

この記録は、台湾沖航空戦で戦死さ

れた別府正芳海軍少尉(駒沢大学出身・海軍飛行予備学生13期)の御遺族を経由して、会員の山田治男氏から提供されたものである。  
 関係者の御了承を得て、転載させていただいた。」

### 1 特攻隊で死んだ夫

大岩たね(一九二二年生、半田市) 夫・虎吉(一九一九〔大正八〕年生)

入隊 昭和十八年九月学徒出陣で繰り上げ卒業、海軍航空隊  
 戦死 昭和二十(一九四五)年四月六日、沖縄戦(特攻隊、二階級特進で大尉)

#### 〈学生結婚〉

主人は内海の出身です。幼いころから名古屋の牧野町(中村区)の伯父さんにあずけられ、近所に住んでいた私と幼なじみでした。旧制の愛知中学(現愛知高校)を特待生で出て、東京の中央大学法科の子科に入り、その後学部に入學しました。東京での学生結婚です。当時は学生結婚は珍しいものでした。主人は最初一人で下宿生活をしていたのですが、「配給制度になるから、何食わせられるかわからない」というので、向こうの母がもらいに来てくれて、結婚したのです。私は市立第二高

等女学校(現桜台高校)を卒業し、すぐの結婚でした。

九月に配給が始まり、早稲田のアパートから日本橋村松町に移りました。三十五円の家賃で二階家を借り、二階を塾にして、夫婦で塾をやりました。中学校一年生から五年生までを教える塾で、主人が五年生、私が一〜四年生を受け持ちました。これで生活が裕福になりました。

主人は入隊する直前の昭和十八年七月に高等文官試験 司法科試験(現在の司法試験)に合格していました。大学では我妻栄先生に師事していました。「戦地から」帰ったら弁護士でもやればいい」と言っていたものです。

#### 〈学徒出陣〉

昭和十八(一九四三)年九月一日に繰り上げ卒業となり、すぐに海軍予備学生として、三重航空隊<sup>加良須</sup>基地へ配属されました。その後徳島の海軍航空隊に移りました。昭和十九年春頃少尉に任官し、姫路航空隊に赴任しました。

私は、主人が繰り上げ卒業してからは、主人の内海の家に行っていました。二人目の子供がお腹にいました。面会は三重の時一回で、徳島へは行けません。二人目が十一月に生まれました。かりでしたので、向こうから来ることもありませんでした。

姫路に移ってから、ようやく一緒に暮らしました。農家の離れを借り、そこから航空隊に通いました。姫路で住んでいたのは九重<sup>くや</sup>村で、航空隊もここにありました。親子四人の暮らしが始まりました。昭和十九年秋の松茸や栗の時期でした。昭和二十(一九四五)年三月二十三日に大隅半島の申良に出発するまで、ここで暮らしました。申良は知覧・鹿屋航空隊とは別で、申良は鹿屋の隣に山を切り開いて基地にしたものです。

申良に出動する前、主人は、「特攻隊に志願して来た」と言っていて帰ってきました。「私や子供があるのに、一言いってくれば」と言うと、夫は、「妻や子があるから、よう志願せん」とは言われたくなかったので、イの一番に「志願した」と言うのです。この時に覚悟はできました。内心は「妻子があることを隠してまで志願しなくても」と、情けなく思いました。

昭和二十年三月二十三日に申良に出発しましたが、三月三十一日の晩に姫路まで修理のために飛行機で帰って来ました。「申良では飛行機は直らない」と言っていて、三菱重工で修理するというのでした。飛行機は自分専用のもので、機種は、私にはわかりませんでした。そして、四月二日の未明、午前五

時頃出発して行きました。四月六日に申良を発ち、沖縄へ向かい、玉砕しました。

戦死は、四月十五日頃、主人の従卒が戻って来てわかりました。私が「主人はどうしました？」と従卒に聞きましたが、彼は私に何も言いませんでした。ただ、町内の役員に「大岩少尉は戦死されました」と話したのです。

戦死公報は昭和二十年の秋に届きました。白木の箱の中身は、紙に「大岩大尉」とだけありました。他の人のように、爪や髪の毛を残すことはしませんでした。戦死の状況については、アメリカの巡洋艦が駆逐艦が一隻轟沈した。しかし、誰がやったか不明だ、ということでした。今から十五、二十年前に東京へ行き、当時の隊長さんにお会いしたところ、「妻子があると知っていたら、出勤命令はしなかった」と言っていました。

### 〈戦後の生活〉

昭和二十年の六月頃、姫路にも空襲がありました。九重村にも二回空襲があり、七月末に内海に戻りました。私の母方の在所が一宮の農家なので、月に一回行ってごちそうを食べてきたものです。

特攻隊の戦死者には、昭和二十年で三万円がもらえました。内報時に

一万五千元、公報時に一万五千元です。当時ではかなりのお金でした。けども、もらえたのはそれっきりで、昭和二十七年になってようやく国の総務庁

からお金「遺族年金」がもらえるようになりまし。その間は本当に苦勞しました。実家は内海の旅館でしたが、兄弟が多いので、独立して生活するために、昭和二十一年に半田同胞園へ入り、寮生活を始めました。同胞園は正式には、愛知県職業補導所と言いま。そこで洋裁を習い始め、子供二人は成岩の小学校へ行かせました。ところが、物価の急上昇で預金が無くなり、洋裁店の計画は駄目になってしまいました。

そんなとき、半田市の学校事務員の募集を知り、市の職員になって、退職まで勤めることができました。半田中学、図書館、亀崎中、乙川小、亀崎小と勤めました。

同胞園の時、子供が「はやて」になり困りました。病院の支払がでず、着物を買りました。この時が一番苦しい時でした。あとは何とかなりまし。皆苦勞していた時だったので、耐えられたと思います。もともとのんびりした性格ですし、満二十三歳で未亡人になりましたが、再婚はしませんでした。主人と比較すると、再婚する気にはな

れなかつたし、勤めに夢中でした。同胞園は戦争未亡人が二十五人ほどいて、その子供もたくさんいました。

### 〈夫の遺書〉

遺書と辞世の歌があります。戦死公報の時、勲五等をいただきました。『雲流るるはてに』という特攻隊などの戦没学生の記録集を作る時、編集部から手紙を提供してほしいという申し出があったのですが、返してもらえないというので断りました。今回こうして手紙が日の目を見ることになり、よかったですと思います。

子供のいない戦死者の妻はかわいそうですね。自分の跡継ぎが残らないのですから、親がやりきれません。私は幸せな方です。再婚しなければやっていけなかつた人も大勢いたのです。再婚せずにやってこられたのも、主人が子供を残してくれたおかげだと思つてます。

靖國神社にはよく行きます。それから、申良にも特攻記念碑ができました。基地跡が公園になっていて、平成七(一九九五)年十月十三日に記念碑の前で、出撃戦没者追悼式をやつて下さいました。鹿児島空港から車で小一時間のところの肝属郡にあります。毎年十月十五日に仏式と神式で慰霊祭をやつてくださいます。鹿屋の自衛隊員

も来て、全国から一〇〇人ぐらいが集まります。出口役場が世話をして下さいます。

(ききとり、一九九六・一〇)

### 《大岩虎吉の手紙と遺詠》

#### 【妻たねあて】

○昭和十八(一九四三)年八月末(推定)

(略) 洗濯にも馴れ、炊事にも面白みを感じはじめ、今では何の不自由もないが、お前のことが気懸かりだ。身体を大切に元気を充分回復するまでは、決して働かうなどといふ気は起してはいけなから、人生九十悠々たる長閑な気持で暮す様にして下さい。

僕の帰る日には、結婚当初の澆濁たる元氣と若さで、一層美しくなつて居て下さい。精神的にも美しく、肉体的にも美しい理想の妻として迎へて下さい。

絶え間なく心に浮かぶ白雲に

乗りて帰らむ吾が妻ごみに

いとし子に乳房すはせて待つ妻を

想ひ浮べて心慰む

(付記) この手紙は、虎吉が中央大学を昭和十八年九月に繰上げ卒業する直前に東京から、出産のため実家に帰つて居た妻たねに送られた

ものである。卒業と同時に海軍予備学生として入隊したから(事実上の学徒出陣)、出征軍人が妻に送った「遺書」として、読み取ることができよう。

【一般あての遺詠】

和気隊護皇白鷺隊 大岩 虎吉  
○敷島の和気男子の名を負ひて  
にほひゆかしき花と散らまし

○潔よく桜と共に散りゆかむ  
大和男子の名に恥ずして

【妻たねにあてた遺詠】

(絶壁?)  
○われはきく愛欲苦悩のぜつへきに  
求めずしてしる魂のありかを

○なやみにも世のかなしみに  
さからはで

くるしみなやむは

(男?)

をのつねなるか

(付記) たねの手許には、特攻隊出撃直前に色紙に書かれた虎吉の二種類の遺詠が残る。前者は、生命を捨てることを名譽とする建前の作品であり、たね宛ての和歌は、死なねばならない人間としての苦悩の本音が率直に表現されている。

女高生の手紙を抱いて  
敵艦に体当たり攻撃した  
堀元官一命の実状判明・  
第二報(まとめ)

少飛甲15期生会事務局

1 前号(会報『特攻』第71号)に掲げた情報の要旨について

米海軍駆逐艦「USSイングラハム・DD-694」は、1945年5月4日午前7時半頃から、日本軍機の攻撃に遭遇し、対空砲火等で反撃、午前8時40分頃、1機の特攻機(レポートでは零戦?)が、被弾による損傷を受けつつも同艦左舷に命中、艦壁に損傷を与えた。艦横の損傷部に残存していた特攻機の機体の一部は、同艦デッキで回収されたが、その中から飛行チャート、手紙他が発見され、飛行チャートにより出撃地は、都城飛行場と判明。手紙の宛名から搭乗員は、堀元官一と判明された。

(注) 回収されたパラシュート片他・飛行チャート・手紙(慰問文)の所在は、連絡調査するも不明である。

2 特攻体当たりの日時について

前記5月4日午前8時40分頃となっており、日本側の特攻関係の文献では、

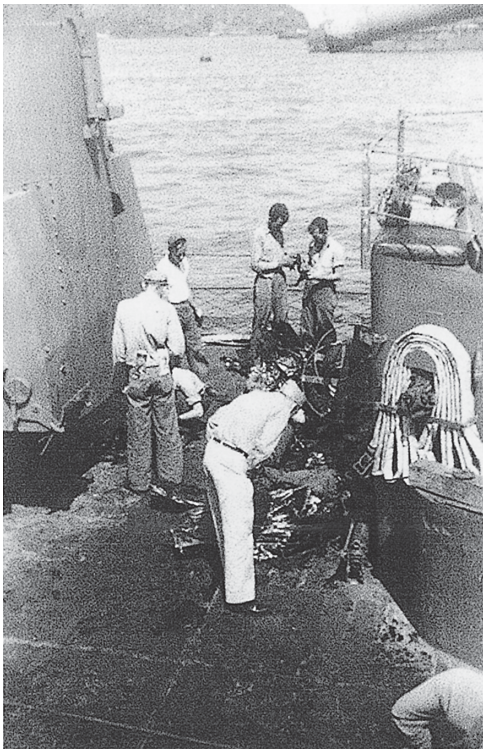
5月11日となっているが、前記のとおり、同艦は、5月4日以後戦列から離脱している状況から、5月4日が正しいと史料される。

(注) 特攻協会編『特別攻撃隊』第四版では、戦死日が20年5月11日、氏名が「堀元官一」となっているが、次の改訂五版で訂正される。

3 女高生の手紙(慰問文)について  
手紙の作成者は、加藤ひろ子?1年3組となっているが、寺井氏(第60振武隊長平柳芳郎少尉(陸士57期)の遺族寺井俊一氏)はその後、桜町高校の調査を続け、桜町高校同窓会関係者について、聴き取り調査をした結果、当時、生徒全員が慰問文を作成したこ

と、1年3組に加藤姓は1名しかいないこと、「ひろ子」は誤訳であったことが判明した。

桜町高校同窓会発行『桜友会誌』第53号(平成19年1月発行)に、「戻つて来た特攻隊員への手紙」と題して掲載された、加藤さんの本名は「春恵(当時13歳・昭和25年卒業・高校2回生)である。なお、加藤春恵さんは、戦後、世田谷区池尻にお住いであったが、平成9年8月、急病により物故されたことが判明した。」  
合掌  
(文責・少飛会事務局・橋本正雄)



米駆逐艦イングラハムのデッキに回収された特攻機の残骸・米海軍撮影  
資料提供 トム・ベッシュ

# コミンテルンの昭和史への介入度は如何に

陸士61期 高橋 晃太郎

〔編注〕日本会議の機関誌・月刊「日本の息吹」8月〜9月号に連載された、

中西輝政京都大学教授と小堀桂一郎東京大学名誉教授の特別対談「いま、歴史の書き換えが始まった！コミンテルンと昭和史の真相」は、大きな波紋を生じ、我が国のみならず世界の近・現代史の真相が明らかになりつつあることを示した。旧ソ連赤軍参謀本部情報局GRUの未公開文書を基にした『GRU帝国』、あるいは、米ルーズベルト政権内に二百数十名に上るソ連のエージェントがいたことを明らかにした『ヴェノナ文書』等、この10年来、旧ソ連、アメリカ、イギリス等の秘密資料が続々と公開され、20世紀の戦争や内乱の多くが世界革命を志向したソ連コミンテルン及び中国の共産党ネットワークの工作と深い関わりがあったことが公然の秘密として証明される時代が到来したとされる。

本稿は、これらの関係資料や参考文献を基に、「コミンテルンの昭和史への介入度」について、筆者が検討して

取り纏め、その要点を分かり易く整理解説した論稿であり、埼玉陸士61期生会の会誌に寄稿したものを、筆者等のご了承を得て転載させていただいた。」

## 1 張作霖爆破写真の不思議

昭和3年6月4日朝、蒋介石の国民革命軍の北伐に敗れた張作霖は、北京を落ち延びて奉天に帰る朝であった。張を乗せた特別仕立ての軍用列車は夜の京奉線を走って、間もなく終点の瀋陽駅に到着しようとしていた。列車が奉天市外、西北方南滿洲鉄道線の陸橋下を通過するクロス点に差し掛かった刹那、大爆発が起こって陸橋は吹っ飛び、列車はずたずたに引き裂かれた。張作霖は重傷を負い、中国憲兵隊の自動車に乗せられて奉天内の居城・大帥府に帰ったが、午前10時絶命したとされる。

戦後の極東国際軍事裁判で、元陸軍省兵務局長田中隆吉少将が証言、暗殺の計画者は、関東軍高級参謀河本大作大佐であると暴露した。当時を振り返って、田中はこの裁判で終始検事側に協力、このような軍人がおるものなのだと思議に思ったものであった。また『文藝春秋』昭和29年12月号に「私が張作霖を爆殺した」と、河本告白記が載せられているという。河本大作は、

戦後、太原戦犯管理所に入れられて、中共の戦犯管理の下で3年間過ごして死亡、手記も何も書いてないという。告白記は、河本の義弟で、作家の平野零児が、河本の一人称を使って書いたとも言われている。

長年にわたって解せないものの一つに、よく見るこの張作霖の爆破の残骸写真であるが、線路に仕掛けられた爆弾が爆発したのに、列車の下部の車輪部分はそのまま、屋根の上の方が爆破されているというのは不思議である。また、張作霖が乗った特定の客車だけを爆破させることが、一体できるのかと思えるのである。

戦後60年を経過して、ソ連の情報工作機関の秘密文書が徐々に公開されるようになり、ソ連の切れ者の工作員エイトインゴンなる者がスターリンの命を受けて、日本軍の仕業に見せ掛けて、部下が同じ列車に乗り込み爆破したのだと、壊れた客車の写真を自分の回顧録に載せて発表しているという。それならば、あの爆破写真は納得のいくものであると言ふべきである。

## 2 近衛文麿首相の内心不可解な想い

昭和20年2月、近衛が昭和天皇に上奏した近衛上奏文に「何者かによる目

に見えない力が働いて」支那事変の果てしない拡大、日独伊三国同盟、更に南部仏印進駐等々に追いやられて行つたと記述されている。

近衛は、昭和20年12月6日、連合軍より戦犯容疑者として指名され、12月16日東鴨拘留所に出頭を命ぜられた。その朝、服毒自殺した。当時の新聞に近衛は「僕は運命の子であった」とつぶやいていた記事を見た憶えがしている。上奏文の内容がいつも頭から離れていなかったのであらうと思われる。また、自分は平和主義者なのだった。

近衛が初めて首相の座に就いたのは、昭和12年6月、満洲事変以来の軍部の政治介入を憂えた元老西園寺が天皇の名によって軍部を押さえることができるかも知れない、最後の切り札として、位人臣を極めた46歳の近衛を推薦した。国民からも拍手で迎えられた。しかし、その翌月蘆溝橋事件が勃発、停戦の試みも実らず、意向に反し杉山陸相の求めで内地から3個師団派遣の重大決定を行う。南京占領の時点では、参謀次長の多田駿中将は平和交渉を進行(時の参謀総長閑院宮は単に飾り者)したが、陸軍の強硬派の意見が強くて止められなかった。却って、「爾後国民政府を対手(あいて)とせず」と声

明、やがて行き詰まって辞職。当時近衛のいわゆる顧問団を最も掌握したのが、ゾルゲ事件で逮捕された朝日新聞記者の尾崎秀美、既にいろいろ取り沙汰されている如く、支那事変をやらせたかったのは、中国共産党とスターリンであったのであろう。戦後、社会党の佐々木三等が毛沢東に「戦争をして申し訳ありませんでした」と言ったら、毛は「国民政府を潰せたのは日本軍のおかげです。謝る必要などありません」と感謝されたというのは、正に本筋のことであろう。

近衛は、昭和15年7月、第2次内閣首相として登場「強力な挙国政治体制を樹立するために微力を尽くしたい」と声明。国民を基盤とする一大政党によって軍部を押さえつつ東亜の天地に光明をもたらす日本の実現構想も、やがて軍部や官僚から「その根底に共産主義思想が流れており、日本の国体と相容れざるもの」と攻撃を受ける。一方、侵略国日本との世界の風当たりは強く、殊にアメリカの態度は強硬、日米首脳会談を試みたが失敗、ハル国務長官の反対は特に強かった。9月6日の御前会議で「外交交渉により10月上旬ごろに至るもなおわが要求を貫徹しうる目途なき場合においては、直ちに対米（英・蘭）開戦を決定す」と帝

国策遂行要領を決めた。

この我が要求とは、日華事変処理に米英が容喙妨害しないこと、米の対日石油禁輸および米英蘭の日本資産凍結を解除することなど、到底見込みはなかった。10月16日内閣総辞職、東條内閣へ移管する。

### 3 介入疑惑の数々

(1) 前出の張作霖爆殺については、次の公開文書が参考とされる。

『GRU帝国』GRUは旧ソ連赤軍参謀本部情報総局、ゾルゲもこの機関の情報工作員。GRUの未公開文書に基づいて、これまでの昭和史の通説を根底から揺るがすような新発見、核心に触れた記述が多い。例えば、張作霖爆殺など数々の工作活動。

『マオ』(MAO)・邦訳「マオ―誰も知らなかった毛沢東」(2005年講談社)毛沢東の伝記、神話を綿密な取材と研究によって打ち砕き、残忍な独裁者としての実像を浮かび上がらせる。また、昭和史の通説を根底から揺るがす記述、例えば、中国共産党の秘密黨員であった張治中が、スターリンの指令によって、蒋介石の方針に反して、日中を全面戦争へ引きずり込むべく第2次上海事変を起こしたことなど。

『ヴェノナ文書』(VENONA)アメリカ陸軍省内の特殊情報部が、1943年以降極秘裏に解読してきたソ連情報部暗号の解読内容を1995年から公開した文書。

第2次大戦の戦前・戦中・戦後、アメリカ政府の中枢に、如何に深くソ連の工作活動が浸透していたかが明らかにされている。例えば、ルーズベルト政権では、常勤スタッフだけで二百数十名、正規職員以外では300名近くソ連工作員、あるいはスパイやエージェントがいたとされる。

(2) 「田中上奏文」はソ連の作った偽書

昭和2年4月20日、政友会総裁田中義一陸軍大将を首班とする田中内閣が成立。外相を兼任した田中首相は、それまで長年にわたって主張してきた、対中国強硬政策を実行に移した東方会議、大連会議などで方針を決定。中国の抗日民族運動は一層高まった。

中国は、東方会議や大連会議で議せられた、日本の対中国強硬政策の詳細を探り出して、真相を明らかにしようとし、昭和2年12月号の「時事月報」(南京発行)が「最近東京の某所で入手したものと」して「田中義一が天皇に奉った上奏文」なる秘密文書の華文訳を掲載した。これが中国全土に広がり、更

に英文や露文にも訳出されて全世界に議論を巻き起こし、国際連盟でも取り上げられて、日本を侵略者だとする非難の声が湧き上がった。

日本政府は、この文書が偽作であり、怪文書だと弁明し、否認し、無視しようとした。確かに上奏文の形式として不備があり、内容の一部にも中国人によって加筆されたと思われる文面もある。また、誰がどこから入手したのか不明であり、真偽の程は分からない。平成17年春、モスクワのロシア・テレビ・ラジオ局(RTR)が、シリーズ番組「世界の諜報戦争」の中で「田中上奏文は、日本の国際的信用を失墜させ、日本を世界から孤立させる目的で、1928年にソ連の諜報機関OGPU(KGBの前身)が偽造し、全世界に流布させたものである」と明らかにしている。

#### (参考) 上奏文と称する有名な一節

「支那を征服せんと欲せば、必ずまず滿蒙を征服せざるべからず。世界を征服せんと欲せば、必ずまず支那を征服せざるべからず。もし支那にして完全に我が国に征服せられんか、他の小、中アジアおよびインド、南洋のごとき異服の民族は、必ず我を畏敬し我に降り、世界をして東亜は我が国の東亜たることを知らし



め、永久に我をあえて侵犯すること  
なからしめん。」

残念ながら日本は、この上奏文とは  
ほぼ同じ趣旨の政策をそのまま実現した  
ものと思われる展開をしてしまった。  
偽作と見える上奏文も日本の対中国政  
策、対世界政策の真実を示すものであ  
ると思われるのであった。

(3) 日米交渉を打ち壊したハル・  
ノート作成の最大の人物

財務省のハリ・ホワイト、これと  
一緒に作った財務省のアルジャー・ヒ  
ス、いずれもソ連の工作員、兩人とも  
後日「マッカーシズム」の犠牲になっ  
た。(ヴェノナ文書による)

(4) 日本占領政策に深く介入

G H Q 中のコミンテルンメン  
バー、ハーバート・ノーマン(日本生  
まれのカナダ人)、戦前のイギリス留  
学時代にコミンテルンに加入、秘密工  
作員としてカナダ外務省に入り、戦後  
マッカーサーの特別の信頼を得て来  
日、先ずアメリカ共産党の秘密黨員で  
あった都留重人と接触を再開、マルク  
ス主義憲法学者鈴木安藏を探し出し、  
「憲法研究会」を作らせる。そして、  
日本人の「自発的憲法」による「民主  
的」な憲法草案をマッカーサーに示す  
ことで、日本革命の一里塚としての憲  
法採択を狙った。

憲法第一条の「天皇は、日本国の象  
徴であり日本国民統合の象徴であつ  
て」、ここまではG H Q つまりアメリ  
カの家、「この地位は、主権の存する  
日本国民の総意に基く。」は、ソ連の  
意を受けた極東委員会からの修正、つ  
まり、「国民の総意」を口実に、いつ  
でも天皇制度を廃止できるようにして  
おくというのが、スターリンの対日戦  
略であった。

中西輝政氏は、日本国憲法は「G H  
Q 憲法」というより「コミンテルン憲  
法」だと述べている。

(5) 日中国交回復運動(1972年・  
昭和47年)

近衛内閣当時、尾崎秀美らマルクス  
主義者の巣窟だった昭和研究会の人脈  
の着々とした働き掛けもあって、  
1972年「日中国交正常化」を実現、  
台湾との断交に至らしめたものと思わ  
れる。それ以降も更に活発化し、O D  
A や歴史問題で、中国の主張を補強す  
る国内勢力を作っている。

4 京都大学中西輝政教授の見解

日頃から中西教授の論評には、問題  
の核心に触れている感があり、参考に  
なる点が多いと思っている。国民の多  
くが教授の論説に目を通して、健全な  
判断力を育ててほしいと思うものであ

る。

(1) 人間の心の支えを破壊するマル  
クス主義

マルクス主義・共産主義の真髄とは、  
一言で言えば、人間の心の支えとなっ  
ている、どっしりとしたものを打ち壊  
す、人間と社会にとつての「良きもの」  
を全て潰していくことだと思ふ。それ  
を潰していかないと彼らの言う「革命」  
ができない。

人間の心を支えているものとは、秩  
序とか安定した価値観つまり家族とか  
国家、あるいは歴史、伝統、道徳や信  
仰であるが、そうしたものの大切さか  
ら目を逸らそうとすることが革命の第  
一步とされた。

(2) 日本を破壊する三つの情念

「悪平等主義」、「伝統日本の憎悪」、  
「アジア主義」

① 無条件に「日本という国は悪い」  
ということが、物を考える大前提に  
なっている。彼等を導いている一つ目  
の情念は、社会主義的な「理想」はな  
くさない。つまり「悪平等の情念から  
くる社会主義衝動」

② 二つ目は「日本の憎悪」、日本  
は兎に角悪い。何故かと言えば、「侵  
略戦争をしたじゃないか」。それから  
日本の伝統や天皇制などというものは  
「半封建的な人間抑圧の機構だ」と完

全に「32年テーゼ」のままの日本観に  
凝り固まっている。

③ 三つ目の「アジア主義」、日本は、  
韓国や中国に謝罪し、将来「東アジア  
共同体」を作って、環境問題、人権問  
題その他で協力していつて初めて「悪  
しき日本」を乗り越えることができる。

尾崎秀美の自供した検事調書にも、理  
想として目指すのは「日本革命だ」と  
ある。それは急には出来ないで、先  
ずはシナ革命・中国共産党と組む。そ  
して、日本を大陸の戦争に引き込む。

それによって英米との対立関係を激化  
させる。そして、日本の敗戦後革命を  
達成する。それから、ソ連、中共、「日  
本共和国」の三者が東アジアの中核勢  
力となり、朝鮮、ベトナム、フィリピ  
ン、ビルマを社会主義化していく。「こ  
れが私の理想とした世界革命だ」とあ  
る。

(参考) 福沢諭吉が説いた「怨望」

『学問のすすめ』第13章に「怨望」  
とある。諭吉は色々な悪徳を挙げて、  
どんな悪徳にもどこかい所はある  
ものだが、どうにも役に立たない悪  
徳が「怨望」である。これは自分が  
向上して幸せになろうとするのでは  
なく、幸せに暮らしている人を引き  
ずり降ろして、それによって平等を  
実現しようとする衝動である。どこ

にも美点の見付けようがない、と指摘している。

### (3) 日本文明の特質「誠」、素直な姿勢のマイナスイメージ

日本人として決して卑下すべきではなく、世界に誇るべきところもあるが、疑うことを知らない。これが戦後の日本では、国を貶めるような解釈をする勢力に逆用されてしまった。

(参考) 戦前の陸軍中野学校では、謀報や謀略をやる人間を作るには、「究極の誠」が重要という教育を行っていた。ルパン島の小野田寛郎氏は、「敵の言うことを信用するな」の信念の下、捜索隊や現地警察からの投降の呼び掛けを信用せず、30年間戦い続けた。

## 5 感想

かつて、マッカーサーは、朝鮮戦争での共産軍の南進の事態で愕然として目覚めた。日本人は、共産主義の危険について早くから気付けていたのに、アメリカは、その日本を叩いて共産主義の増大に道を開いてしまった。

彼が上院軍事外交合同委員会で証人に立ち、「太平洋において米国が過去百年間に犯した最大の政治的過ちは、共産主義者を中国において強大にさせたことだと私は考える」と述べ、深刻

な反省をしたという事実や、また、今まで触れてきたコミンテルンの策謀・介入など、一般の新聞、テレビ等で聞きしたことはない。目にするのは、日本の将来を憂える団体からの機関誌のみである。

戦後の日本人が大変歪んだ歴史観を持ってしまったのは、戦後半世紀の間、歴史資料の公開が甚だ一方的で、偏っていたことによる。日本側の資料は、敗戦時に押取され、連合国、戦勝国の都合のよい資料のみで、更に意図的な謀略の如きも行われて、自分の国を悪く言いたいという自虐史観のみが大手を振って歩いてきた。教科書検定も圧力に屈する場面が多々である。学者、マスコミ、出版界の知識人社会が一つになって、特定の解釈をする出版物しか出版させない、あるいは学説として流布させない風潮が出来上がってきたのであろうか。

戦後60年を経過して、次第にまともな資料が公開されても、左翼イデオロギーにとつて都合の悪い情報は排除してしまうような情報構造があるのであろう。岩波書店、朝日新聞、進歩的文化人などは、その最たるものである。安全保障面、憲法問題、教育の問題等で、日本が普通の当たり前の国にならうとする思考が出てくると、忽ち

国の内外を通じて、歴史カードを利用して叩いてくる態勢が出来上がってしまった。

特に中国は、日本は文句を付けなければ謝る。謝れば金を出す、というカラクリに気付く、この手法は永久に捨てないであろう。中国人の中に、今までのODAの貢献による数々のインフラ整備を挙げて、「もう日本は謝らなくてよい」という書物を発刊すれば、忽ち失脚させられてしまう。一方、日本国内には、平気で嘘の証言をして先方に媚を売る人間が多数出現している。

安部首相の「戦後レジームからの脱却」「美しい国」「教育再生」等々当然の方針が掲げられても、大衆は無関心、目先の安逸な生活・損得が優先で、参議院選の結果の如くなる。台湾の金美齡氏は、これを「日本人の精神年齢12歳の仕業」と称している。

先達てテレビ朝日報道ステーションで、色々の場面に顔を出している論説者が、国の予算の削減に「現在の国際状況を見れば、日本に特に不安が起こっている訳でもないのに、戦闘機1機200億もするのを購入するとかしないとか、そのような必要はないのではないか、国防予算削減を考えるべきだ」と述べていた。全く平和ボケの最たるもので、これが国民の多数の感覚

かと思うと、独立国日本の存在は、最早不可なのかと、無念な気分となるのである。

思うに、日本人の多数は、古代から長年にわたり、色々の文化の恩恵を中から受けてきたと感謝の気持ちを抱いていると思われる。また、今回の大戦で多大な迷惑を掛けてしまったと反省もしている。しかしながら、今程反日行動を取られると、また、反発の姿勢を抱くのも自然と思えるのである。

想像するに、恐らく直接大戦の当事者であった毛沢東等は、大戦の実情を解していたが、現中国の指導者等は、真実を解そうとせず、被害者意識のみで固まり、大戦に勝利を収めた賠償として、日本に九州以南を割譲せしめるべきと思っているのではないか。現に沖縄は、日本の領土であるという謂れはないと述べている。したがって、東支那海は、当然中国の内海、そこでガス田開発は国内問題であり、日本が文句を言う筋合いではないと考えているのである。また、3兆円を超えるODAなども、賠償のほんの一部と思っている。中国の青少年には、数々の反日教育を展開し、一方、日本の青少年は何の歴史の真実も教えられぬまま成長し、中国の宣伝通りの自虐思想のみが育てられている。

コミンテルン介入の数々を日本人の多数が目にする事態が展開されれば、それで相当量の自虐思想が改まっていなくては考えられぬが、若干のブレイキになっていけるのは確かであろう。今後50〜100年を見据えて、青少年教育の重要性が、何とか改善されぬかと期待するのである。

〈参考文献〉

○『日本の歴史』「大正、昭和の主役」(暁教育図書)

○『昭和日本史』「昭和の序幕」(同右)

○『日本の息吹』19年8月号・9月号(日本会議)

《編注・参考》

●『マオ』(MAO, ユン・チアン、ジョン・ハリデイ共著。邦訳は『マオ―誰も知らなかった毛沢東』、2005年、講談社) 毛沢東の伝記。

中華人民共和国建国の「英雄」毛沢東神話を綿密な取材と研究によって打ち砕き、残忍な独裁者としての実像を浮かび上がらせた書、のみならず、我が国にとって切実なのは、『GRU帝国』など機密資料に基づいてこれまでの昭和史の通説を根底から揺るがすような新発見、核心に触れ

た記述が多いことである。例えば、張作霖爆殺がスターリンの命令を受けたナウム・エイティンゴンが計画し、日本軍の仕業に見せ掛けたものだったことや、中国共産党の秘密党員であった張治中がスターリンの指令によって蒋介石の方針に反して、日中を全面戦争へ引き摺り込むべく第二次上海事変を引き起こしたことなどが記されている。

●『GRU帝国』(Imperiya GRU,アレキサンドル・コルバキデイ、ドミトリー・プロコロフ共著、本邦未訳) GRUとは旧ソ連赤軍参謀本部情報総局のこと。リヒャルト・ゾルゲもこの情報工作員であった。そのGRUの未公開文書に基づいて、張作霖爆殺など数々の工作活動が明らかにされている(GRU文書そのものについては、プーチン政権時代になってアクセスが難しくなりつつある)。

●『ヴェノナ文書』(VENONA) アメリカ陸軍省内の特殊情報部が、1943年以降、秘密裏に解読してきたソ連情報部暗号の解読内容を、1995年から公開、その文書を指す。解読作業はカーター・クラーク将軍が大統領にも秘密で始めたプロジェクトだったが、そこには、第二

次大戦の戦前戦中、そして戦後、アメリカ政府の中核に、如何に深くソ連の工作活動が浸透していたかが明らかされている。例えば、ルーズベルト政権では、常勤スタッフだけで二百数十名、正規職員以外で三百人近くのソ連の工作員、あるいはスパイやエージェントがいたとされる。同文書はインターネットで誰でも閲覧できるが、本邦未訳。

●『ミトローヒン文書』(The Mitrokhin Archive) 2005年刊、ミトローヒン、クリストファー・アンドリュウ共著、本邦未訳) 旧ソ連のKGB対外情報局文書課長ミトローヒンは、冷戦末期にイギリスに亡命、KGB本部の機密文書を大量に持ち出した。それには欧米、アジアへのKGBの工作活動が活写されている。冷戦期の日本においてもKGBの工作によって、多くの日本の政治家や官僚、マス・メディアが国益に反するような行動に従事していたことが、実名やコードネームで紹介されている。殊に在モスクワ大使館時代に、ハニー・トラップ(女性スキヤンダルによって弱みを握る手法)に引っかけ、後に本省に戻って日本の暗号システムを含めクレムリンに大量の機密情報を流していた日本人

外交官「ミーシャ」の例は衝撃的である。

●「マッカーシズム」第二次世界大戦後の1948年頃より1950年代前半にかけて行われたアメリカにおける共産党員及びそのシンパ排除の動き、いわゆる「赤狩り」を指す。その推進者だった共和党右派のジョセフ・マッカーシー上院議員の名を取って名付けられた。告発された共産主義者達は、米政府や軍関係者、ハリウッドの芸能関係者、作家、更には、カナダ人、イギリス人、日本人などの外国人にまで及び、その影響は西側諸国全体に行き渡った。その反動も大きく、マッカーシーは激しい批判に晒されたが、マッカーシーが依拠していた『ヴェノナ文書』が近年公開されたことにより、その正しさが証明された。

『日本の息吹』平成19年8月号・9月号「コミンテルンと昭和史の真相」より)

相」より)

相」より)

終戦二日前の特攻

藤田重喜伍長 (特幹1期)

特幹1期 深井 正昭

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会発行の『特別攻撃隊』誌によれば、特攻隊による本土近海対機動部隊戦闘に関しては、本文第二章「陸海軍航空特別攻撃隊」の「六 本土近海対機動部隊戦闘」として、僅かに900字程度の記載があり、その特別攻撃隊戦没者名は、同誌第二部に列記されているが、内「陸軍の部」の「一 陸軍航空特別攻撃隊」の「4 内地および満洲」関係の最後の部分に、終戦二日前の昭和20年8月13日、千葉県犬吠埼東方洋上で戦死として、4名の方々のお名前が掲げられている。その中のお一人が特別攻撃隊第201神鷲隊所属藤田重喜伍長(特幹1期・機上通信・戦死後陸軍少尉)である。藤田伍長は、第201神鷲隊の編隊長小川満中尉(陸士57期)操縦の二式双襲機に同乗、8月13日夕刻、栃木県・那須野飛行場から出撃、「われ、突入す」の無線通信を発して、敵機動艦隊に突入、散華された。私は、同期生等の慰霊顕彰の環境として、同伍長について調べたので、次のとおり紹介します。

藤田伍長は、北海道・釧路市で印刷業を営む父・晋太郎、母・たつの四男四女の三男として大正14年8月出生、昭和7年4月釧路第四小学校(現・釧路市立旭小学校)入学、昭和13年4月北海道立釧路中学校(現・道立釧路湖陵高校)に第26期生として入学、昭和18年3月同校を卒業し、旧制東京高等農林学校受験のため上京、受験勉強中の昭和19年1月陸軍特別幹部候補生第1期(航空)を志願、同年4月10日、陸軍航空通信学校長岡教育隊(教育隊長内藤二三男中佐・陸士34期、茨城県東茨城郡長岡村・現茨城町長岡)に入校、12個中隊2500名の候補生から選抜され、適性検査を経て、機上無線課程の第10中隊(十勝隊・中隊長深澤欣一大尉・航士54期)に配属され、汗と涙と血の滲む厳しい訓練に耐え、同年10月1日陸軍上等兵、同年12月29日特別幹部候補生の課程を優秀な成績で卒業し、昭和20年1月銚田教導飛行師団に転属、同年4月10日陸軍兵長。

同師団は、同年5月2日二式複戦による第201〜第208神鷲特別攻撃隊と九九双軽による第253〜第256神鷲特別攻撃隊の12個隊を栃木県の黒磯にて編成、藤田兵長は、第201隊(隊長小池辰男中尉・少候23期)隊員を拝命し、陸軍伍長に任官した。

時は流れて戦後50年、平成6年8月藤田家では、五十回忌にちなんで軍神故藤田重喜之命五十年祭慰霊祭を執り行い、『父母を愛し、兄弟を愛しそして友に愛され』と題する記念誌を作成して、親戚や知人に、そして同期戦友達にも贈本された。そのサブタイトルには、「故 藤田重喜 昭和20年8月13日 19歳の生涯を終える」とあり、次頁に次兄藤田三郎氏の序文と長兄故藤田久氏の「人間重喜突進」と題する追憶文が掲載されているので、次に転載させていただきます。

◇ はじめに ◇ ◇

久兄が五十九歳のときに亡くなって、私が藤田家のでっぺんになってしまいました。

すべては天命(寿命)なのでしょう。あつと言う間に七十一歳となりました。重喜が生きていたなら満六十八歳でしょうか、この冊子に重喜の経歴、最後までいろいろなことが語られています。

私が東京より昭和十八年十月学徒出

父母を愛し、兄弟を愛しそして友に愛され

故 藤田重喜 昭和20年8月13日 19歳の生涯を終える





幸福だ。宜しく鞭撻を受け兄等の意志をつげ、地方に居ては両親に孝を致す事が最大の忠なり。兵にあつては上官の命に服し、機を見て吾が身を死地に投ず、これ最大の忠にして又幸なり、先ずは安達お知らせにて。(大金の小母さんに下駄を戴いたのだからお礼状出しなさい。)(注・当時、藤田伍長らは、黒磯町住吉町の大金家を宿舎にしていた。)

昭和20年5月下旬から6月上旬に神鷲隊隊員達は、交互に休暇が与えられて帰郷したが、その後師団長高品少将の英断によって新那須温泉・山楽旅館を宿舎として、旅館と飛行場を往復して訓練に励んだが、この宿舎の移動は隊員達の融和と一致団結を図り、生活環境の改善と向上を意図した措置でもあった。

山楽旅館に移った朝、軍服も飛行服も真新しく、腕に日の丸を縫い付けて、同第201隊の軽部芳男中尉(陸士57期)、横山善次少尉(特別操縦見習士官2期)等とバスから降りた藤田伍長の手には、大金家を出発する早朝に、近くの女学生から贈られたマスコット人形が握られていた。山楽旅館の生活は、階級を超えた生活であり、散華した後、悔いのない精神修養と敵艦突入の厳しい訓練が続けられた。戦局の緊

迫化とともに、朝に夕に、いざ出撃という緊張の毎日ではあったが、その機は熟さず、次の機会ということで出撃が延びて、隊員一同、顔を見合わせては「また、一日延びたなあ」と言っていて苦笑いをしていた。

8月12日夕刻頃から敵機動部隊の西進を報じ、銚子沖海域の本土沿岸に接近という軍情報によって、第一航空軍から下命された第26飛行団(団長高品朋少将・陸士32期)は、那須野に待機する最精鋭の「と号部隊」九九式双軽機の神鷲第253隊(隊長浅野満祥大尉・陸士54期)並びに二式双襲機の神鷲第201隊(隊長小池辰男中尉・少候23期)に出動命令を与え、両隊特攻機は、飛行場の滑走路に最も近い松林の中に秘匿、慎重に偽装された中で、機材、エンジン、爆装などの整備が進められ、2隊16名の隊員は「鳥の目壕舎」に待機した。

8月13日正午頃、第一航空軍は出撃命令に切り替えたが、この日飛行場は、朝と昼過ぎの2回、敵機動部隊からのグラマン数機の編隊によって、波状攻撃を掛けられたが、飛行機の秘匿・遮蔽が万全で、発見されることなく損害は軽微であった。

同日16時30分、「鳥の目壕舎」付近に戦闘指揮所を移動して、飛行団初め

の厳粛な出陣式が行われた。

最前列に出撃特攻隊員浅野満祥大尉以下8名の双軽隊、小池辰男中尉以下8名の双襲隊が整列し、出撃命令と訓示、そして、冷酒による乾杯が行われ、訣別の挨拶を受けた後、2隊16名の隊員は、2台のトラックに分乗して、愛機の秘匿されている松林に向け移動して行った。

その直後の17時頃、真つ黒な雲が低く空を覆い、夕立が降り始めた。時を同じくして双軽隊6機の待機する秘匿松林に、どこから近付いたのか、グラマン機10機が急降下攻撃を仕掛けてきた。敵は昼過ぎの攻撃において、双軽の秘匿位置を発見し、我が薄暮攻撃を見透かした如くの空襲であった。双軽1番機が炎を上げて燃え出す。20mの間隔を置いて双軽6機が爆弾を抱えたまま燃えている。1番機が爆発する。爆弾倉に入っていた800kg爆弾が爆発、双軽6機全滅である。浅野大尉が涙を流して「高級参謀殿残念です!」と土井中佐にしがみつく。そして、戦闘帽を手に取り地上に叩き付けて「畜生!グラマンの奴!きつと仇を取つてやるぞ」と叫んだ。炎上を確認した敵機はそのまま飛び去つたようだ。

その時、滑走路の方から神鷲第201隊の双襲機が1機又1機、力強

く滑走し、夕空に向かって上昇して行く。土井中佐と浅野大尉は一散に走つて飛行場の端まで出た。

双襲隊小川編隊の2機は、翼を振つて別れを告げ、鹿島灘の方向へと、やがて点となり消えて行った。時に17時30分。同編隊の2機は、第201隊編隊長小川満中尉(陸士57期)機(操縦同中尉・機上通信藤田重喜伍長同乗)と横山善次少尉(特幹2期)操縦の僚機であった。

続いて、10分遅れの17時50分、双襲隊3機が出撃した。小池辰男中尉(第201隊隊長・少候23期)、軽部芳男中尉(陸士57期)、野中次男少尉(特幹2期)各操縦の3機である。

更に、1時間遅れの18時40分、小川編隊の僚機、後藤春夫少尉(特幹2期)機が、夕暮れ迫る中を単機で出撃して行った。

浅野隊は全機炎上したが、小池隊は敵機に発見されず全機出撃できた。ただ、発見されずに出撃できたことが、終戦2日前の特攻散華になってしまつたわけであり、小川中尉、藤田伍長、そして、横山中尉にとっては、全く不幸な運命の岐路であったことにほかならない。

後から出撃した小池編隊機は、犬吠埼付近から雲上に出て飛行し、敵機動

動艦隊上空予定地点で索敵に努力したが、日没も迫り、発見できないまま那須野の基地上空まで帰還したが、密雲のため着陸できず、下館飛行場に着陸し、翌日無事帰隊した。また、後藤機も帰投する小池編隊と遭遇し、索敵不能の状況を知らされて方向転換し、同編隊に追従したが、途中黒磯北方の箒川の川原に胴体着陸を敢行し、機体は大破したが後藤少尉は無事帰還できた。

一方、小川編隊が出撃してから1時間30分が過ぎた。那須野基地戦闘指揮所には、土井高級参謀、倉沢主任参謀、鍋木・稲垣各少佐等が無線機の傍らで静かに待機し、重苦しく息苦しい時間が流れて行った。

やがて、20時少し前、銚子の海軍無線傍受基地より「小川編隊ただいま突入」のモールス音を傍受したとの通報がもたらされた。それとほとんど同時に、第一航空軍の対空無線は、小川編隊の敵航空母艦突入の無線を受信した旨知らせてきた。固唾をのんでいた一同は、思わず歓声を上げた。だが次の瞬間、肅然たる気持ちになった。

特攻隊の成功の陰には、必ず「死」が伴う。参謀として、僚友として、戦果の喜びの後の切ない、割り切れない気持ちには、何物にも替える術もない。

当日の戦果は、小川編隊長機の藤田伍長からの「われ突入す」との無線報告があった直後の20時頃、戦果確認の任務を負う海軍の索敵機から、敵空母及び巡洋艦各1隻から二条の大火柱と黒煙が上がるのが望見されたとの報告により、その戦果は、小川編隊の2機によるものと確認されたのであった。

翌8月14日、土井高級参謀は、第一航空軍の召致命令により、東京・吉祥寺の軍司令部に向出した。司令部の参謀室には、昨日の軍命令によつて敵機動部隊攻撃に出動した各飛行団の作戦主任参謀が集まっていた。

第一航空軍の河辺高級参謀が主宰して、各飛行団による戦果報告がなされた結果、目標を補足できたのは、那須野飛行隊のみで、関東一円から出撃を命令された部隊が数個隊あったが、いずれも天候不良のため、目標を発見できず、中には帰航の夜間飛行で山に衝突する事故により、戦死者を出した部隊もあった旨報告された。

その夜、ささやかながら攻撃成功の祝賀会が開かれ、滅多にこのような会合には出席されないと聞かされていた安田武雄軍司令官も出席されて、土井高級参謀は、幾度か握手を求められ、その夜の主賓となつて各参謀達から祝杯の集中を浴びたが、何か妙に重苦し

く、名状し難い空気が漂っていたと述懐されている。

8月6日の広島への原爆投下、8日23時(モスクワ時間8日17時)ソ連の対日宣戦布告、9日午前、鈴木総理以下6名の最高戦争指導会議、同11時、長崎への原爆投下、同日午後臨時閣議の開催、同日深夜から10日未明にわたるポツダム宣言受諾の午前会議、そして、天皇陛下の御聖断。

8月10日、外務省では、ポツダム宣言受諾の第1電を6時45分に発し、最後の第5電は10時15分で「天皇の国家統治の大権を変更するの要求を包含し居らざることを了解の下に帝国政府は右宣言(ポツダム宣言)を受諾す」とする一連の関係電報は発信を終え、更に同盟通信社のモールスを使用して海外放送を行うなどで、日本政府としても一部軍の戦争継続論を抑えながら、終戦に向かつての態勢が進められていたのである。

14日夜、軍司令部の参謀宿舎で寝就く土井中佐は、翌日正午に陛下御自らの重大放送がある旨を聞かされたが、終戦の放送などとは思ひも及ばず、ソ連参戦、本土決戦に備えて激励の放送があるのだと思っていたが、それにしては少し変だな、と思わぬではなかつた。

土井中佐は15日朝、軍の参謀達と朝食を済ませて、軍司令部参謀室に出勤、同期の軍情報参謀水谷中佐から声を掛けられ「正午の放送は終戦の詔勅である」と説明されて、一番先に頭に閃いたことは、たった1日半前の夕方、何も知らずに敵艦隊に突入して散つた小川中尉、横山少尉、藤田伍長三名の特攻隊員のことであつた。

こんなことと知っていたら、無理にでも出撃を止めさせたのに、すべての後の祭りであつた、とその心境を述べておられる。

しかし、8月9日夕刻、岩手飛行場から出撃した神鷲第255隊の3機(土村中尉機、渡邊少尉機、加藤少尉機)のうち、加藤機はエンジン不調で基地に引き返したが、翌10日昼頃、那須より参謀D中佐が飛来して(茫然自失の加藤少尉に)「何故予備機で直ぐに出撃しなかつたのか」と誹謗、更に第255隊の矢田隊長にも「何故、今朝の払暁に出撃しなかつたのか」と詰問し、更に慰霊祭に出席した吉村、渡邊、石井の御遺族に、戦死地を加藤少尉から伝えさせていることなど、果たして、前記のような親心を持って部下と接していたのであろうか、と甚だ疑問に思われる。

藤田伍長は、大正14年8月15日生ま







中学校とか高等学校などの公共の施設用地として利用されていた。その跡地の一角にある南黒磯自動車教習所の建物から東へ200m程の道路脇に昭和53年11月3日建立の高さ5mもある立派な黒御影石の那須野陸軍飛行場跡碑が、飛行場配置図の副碑を従えるように聳え、近くの民家の庭には、厚さ50cmもあるコンクリートの格納庫の基礎が、苔むしながらも残っていた。

また、終戦直後の8月28日の慰霊祭は、黒磯市(現・那須塩原市)の市街地に接する那須郡那須町高久甲に所在する名利、高野山真言宗高福寺の本堂で行われたことも確認できた。

昭和41年10月、我々の特幹1期戦友会結成に際し、藤田君が特別攻撃隊員として散華されていることが確認され、御両親宛に弔文を差し上げて、次のような御返信を頂いた。

「拝啓 貴信拝見致しました。此の度の企画を心から喜んでいきます。戦後20余年の歳月を経て今日、友情を偲ばれての生存者の集まりはどんなにか嬉しいことでしょう。亡き友も泉下にあつてきつと喜ぶでしょう。そして、皆さんの集いには、姿なき出席を致すでしょう。重喜は御書面のとおり、昭和20年8月13日午後八時、栃木県の黒磯

町より特別攻撃隊神鷲隊の一員として出撃し、鹿島灘沖にて戦死致しました。彼はあくまでも皇国の勝利を信じ、また後から若い人たちが陸続として敵を斃してくれるであろうと、一度帰郷した折に話しておりました。然しながら、彼は敗戦を知らずに没したことは、むしろ親としての私は諦めの一つとしております。

不肖の子ながら彼は良い息子でありました。私方では男三人、重喜の兄二人も戦争に出ましたが、二人共無事に戻り、只今は家業に励んでおります。貴下はじめ生存の皆さんは、どうか逝った戦友の分まで元氣を出して国の為に働き、そして体を大切にして下さい。

尚、重喜は戦死の日感状を拝受し伍長の階級より少尉に昇進、此の度の叙勲にて正八位、勲六等、功四級に叙せられました。

自分たち老いた両親としては、只々日々彼の冥福を祈り続けるばかりで、あとは言葉もありません。

どうぞお集まりの折には重喜の親から皆様にくれぐれも宜しくとお伝え下さいませ。

日を追って冷気を覚える季節となります。どうぞご自愛のうえご健勝をお祈りいたします。

昭和四十一年九月十六日  
 鉦路市末広町九丁目一番地  
 重喜の父 藤田晋太郎  
 深井正昭様 謹啓

因みに、故藤田重喜少尉の法名は、「義耀院釋喜信居士靈位」で、藤田家の菩提寺、鉦路市の間名寺に、ご両親とご一緒に安らかに眠られている。

(平成19年8月31日記)

合掌

参考文献等

- 藤田重喜少尉五十回忌記念誌
- 昭和48年11月発行『丸』11月特別号
- 「土井勤中佐・爆装特攻出陣の記」等
- 最北の特攻出撃基地「後藤野」
- 近衛師団参謀終戦秘史
- 嗚呼 原町陸軍飛行場
- 特幹十勝会・終戦当時の思い出記

# 碑は語る特攻隊⑤

## 空の神兵之像

田中 賢一

所在地 習志野自衛隊駐屯地内



陸軍航空本部の廊下に石膏作りの像があった。戦争末期航空本部は現在の成蹊大学の所に疎開していたので、戦後その倉庫に放置されていたのを、故市川一輔氏が発見し、自衛隊第一空挺団で貰い受けた。足の部分が破損していたので補修し、暫く資料館に展示していたが、昭和43年に石膏像を原型にして金属の像を铸造し、空挺団本部前に設置した。空挺団ではこの像を神

兵像と銘打って、伝統継承の象徴としている。

戦後発足した警察予備隊、その後の保安隊時代には、米軍の影響が強く、陸軍の伝統継承の念はなく、むしろ否定する傾向さえあった。陸上自衛隊発足と同時に創設が始まった空挺部隊は、技術的なことは米軍から取り入れるが、形而上のことは陸軍空挺部隊から学ぶという念が強かった。その表れとして、この像の近くに次のような高札が掲げられている。



伝統なき創造は危殆にして 創造なき伝統は空虚なり

さて、碑は語る特攻隊と標題を掲げておいたので、この空の神兵像に秘められた特攻隊について述べれば、第一は義烈空挺隊である。この部隊は挺進

第一聯隊第四中隊をもって編成したのであるから、隊員の大部は落下傘部隊としての経歴の古い者だった。この部隊の者達が落下傘降下の訓練を始めた頃は、特攻に劣らぬ決断があった。義烈空挺隊が健軍を発進する時の隊員の顔を見ると、初期の頃の落下傘降下に於て培われた精神が窺える。

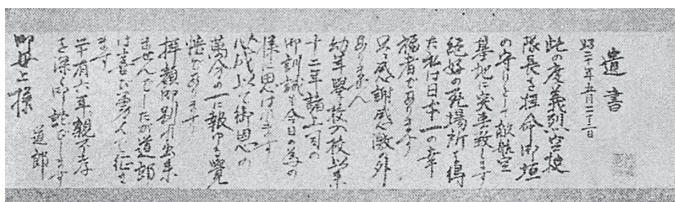


出撃前の乾杯終わり搭乗機に向かう隊員の顔

次は、第四航空軍の事務手続きの怠慢から、参謀が口頭では特攻と言っておきながら、特攻になっていない部隊とドラグに向かった部隊である。プラウエン地区に向かった部隊は、地上進攻部隊と提携出来る計画だったが、レイテ湾岸の二目標に向かった部隊は、敵飛行場を一時的に制圧出来ても、

最後は玉碎しなければならぬ。そうであったから、発進基地アンフェレスの隣南サンフェルナンドの宿舍の壁に花負ひて空うち征かん雲染めん 屍悔いなく我ら散るなり

と誰かが書き遺して征った。話は冒頭のことに戻るが、伝統の継承を確たるものにするため、空挺館と称する資料館には、陸軍挺進部隊を物語る幾多の資料が展示されている。義烈空挺隊奥山隊長の遺書や隊員の寄せ書きなどもある。



義烈奥山隊長の母親宛ての遺書

### 高千穂降下部隊の

### 忘れ難い人々

田中 賢一

高千穂部隊とは第二挺進団のことである。私は初め、団司令部の部員になるはずだったが、故あって残された。

そのことは後で述べる。第二挺進団は、挺進第三、第四聯隊と挺進飛行戦隊より成る。その中で、昭和19年12月6日、レイテ島に降下した者に一人の生還者もない。私は挺進第三聯隊にいたことはないが、中隊長以上の者は全部親しい間柄だったので、戦後2回も現地を訪れた。

語りてもなを語りても尽きざるは  
国に殉ぜしますらをのとも

### 動員下令

昭和19年10月24日、その頃私は、陸軍挺進練習部の下士官候補者(以下「下士候」という。)教育隊長をしていた。昼頃だったと記憶するが、練習部の高級部付の徳永大佐から呼出しがあった。挺進第三聯隊に動員が下令されたことを知った。レイテに敵が上陸したのは4日前の20日である。来るものが来たと思った。下士候隊は解散し、派

遣勤務者と下士候は原隊に返せ、第三聯隊は空母で南方に行くので貴官は佐世保に行き海軍と打ち合わせをせよ、ということだった。第三聯隊に続いて第二挺進団司令部、更に第四聯隊、挺進飛行戦隊の動員が下令されることは分かっていった。

聯隊や飛行戦隊はそのまま動員編制になることができるのだが、挺進団司令部は、動員計画によって挺進練習部で編成しなければならぬ。将校は戦時命課と称し、予め内定していた。挺進団長は徳永賢二大佐、私は部員(師団以上の参謀に当たる職名)となっていた。私は下士候隊に戻り、解散の事務処理をしたはずだが記憶がない。その時点では、後期教育の段階で、学生、区隊長、下士官、皆挺進第三、第四聯隊及び滑空歩兵聯隊からの者だけだった(第一、第二聯隊は、その直前に南方から帰って来て、下士候には入っていないかった)。申し遅れたが、練習部

及び挺身聯隊は、宮崎県児湯郡川南村(現在は町)に、飛行戦隊は、同郡新田村(現在は新富町)にあった。

### 佐世保における別れと

### 私が残されたこと

私は、その晩の夜行列車で佐世保に行った。佐世保では鎮守府に行き、空

母は隼鷹で明日入港と聞いた。次いで重砲兵聯隊に行き、部隊の宿泊について打ち合わせをした。その後、聯隊長等の宿泊する旅館を設営し、それらが済むと早、部隊が到着した。

その晩は聯隊長の宿舎で一献酌み交わした。集まった者は、聯隊長白井恒春少佐(42期)、聯隊付土屋茂少佐(50期)、副官河野寿大尉(特志)、中隊長(番号順)松下兼道、桂善彦、大城隆、蓬田正之(以上大尉54期)、重

火器中隊長久富薫大尉(準52期)の8名だった。その晩は灯火管制でほの暗い室内で、特に気負うことも悲壮感もなく、寛いだ一時を過ごした。その人達、大城、久富以外はレイテ作戦で戦死、大城、久富は第二次降下となっていたが、それが取り止めとなり、ルソン島で戦い、久富は戦死、大城は負傷生還したが、戦後交通事故で逝去した。皆私とは親しい間柄だった。個々の人の戦死状況や思い出は後で述べる。

白井聯隊長には、「司令部は飛行機で行くので先に着くでしょう、何か奥さんに伝えることがありますか」と申したら「何も無い」と答えられ、「煙草を沢山もらったからやるよ」と、鵬翼を10個ばかりいただいた。この人と

の御縁は後で詳しく述べる。部隊は翌日乗艦した。岸壁で見送っ

ていた私の前を通るとき、昨日まで下士候隊にいた者は懐かしそうに敬礼した。「俺も後から行くからな」と私はこたえた。下士候の一人は乗艦したら着けると言われたとて、伍長の階級章を見せた。任官は12月1日のはずだが、聯隊長が専行したのであろう。

艦が出港するまで待たずに、私は急いで宮崎へ帰った。挺進練習部に戻り、徳永大佐に復命すると、稲本が帰ってきたので部員を譲れと言われる。司令部の動員は下令されていたがまだ完結していない。稲本少佐は第三聯隊創設時から聯隊付だったが、1年ほど前に航空士官学校に転属になっていた。それが今度の動員で人が不足すると中央が思ったのか、挺進練習部付に戻されてきた。帰るや否や徳永大佐に部員にしてくれと強要した。田中は第1回の出動(パレンバン作戦)のとき部員

だったので今度は自分の番だと、強引に主張したということだった。それに私が就くはずの部員は、編制表では少佐になっており、私は稲本より1期下でまだ大尉だった。そんなことで私は残ることになった。

### 第三聯隊出動時のこと

挺進練習部の隷下部隊の各聯隊や戦隊は、若干の余剰人員を持っており、

何時でも出動できる態勢になっていた。昼頃動員が下令され夕刻には出動準備が整った。そこで、聯隊長は営外居住者に一時帰宅をさせた。私は佐世保に向かっていたので知らないが、練習部では夜通しトラックを走らせて営外居住者の輸送を担当したという。

家族との別離について、昭和30年頃書かれたガリ版刷りの冊子があるので、それを紹介するが、真情胸に迫るものがある。

白井聯隊長 妻 万佐子

・・・昭和十九年十月二十五日、出征の日午前二時玄関を発ちつつ、幼い長男にはほほずりして「元気で帰ってくるよ」とふりかえった。落ち着いた主人のいつもと少しも変らぬ姿に、これが永久にかへらぬ人になってしまうとは思はれなかった。

当時私のお腹には今にも生まれる三男がいた。身重の私に心配かけぬようにと思つてか、自動車の中からニッコリ笑つて拳手の礼をして闇に消えていった。心の中で合掌して見送った私は、心細い留守に出産のことなど考えて何とも言えなかった。ニッコリと笑つた主人の顔と手袋の白い色が、十三年経つた今も眼にしみついてい

る。主人の発つた日の朝、台所にいつて見ると、当時身重の私のために主人はいつのまにか、納屋から炭まで運んで来てあり、私が日頃困つていた不便なつるべの井戸水もバケツに何杯も汲んであった。私は涙で何も見えなくなった。  
三男誕生後三日目、ラジオはブラウエン飛行場に高千穂落下傘部隊降下占領と報じた。三男出生はついに主人に伝えるすべもなかった。  
天川忠雄准尉 妻 真理子  
・・・月のいい晩には、夫の吹く尺八の音色に遠いふるさとの家を思い、そして父母を偲んだ。  
我が夫のやさしき愛にみちびかれ  
女の幸を知りてうれしき  
夫と別れたあの夜は、月のない暗い晩だった。かくある日は軍人の妻として覚悟していたものの、異郷の地に只一人取り残された悲しさは、何にたてることが出来ようか。  
東の空が白む頃、こんもりと木々にかこまれた社にぬかずいて、夫の無事を祈りつづけていた私だった。  
さらばとて夫の握れるたくまשיき  
み手のぬくもりも残れる  
このぬくもりの残れる手は、夫との再会の日まで、慣れぬ農作業に苦勞をしつづけて来た手だ。

梅野九中尉 妻 チヨ子

・・・いつも夕方になると隊の自動車が停まり、主人の長靴の音がこつこつと聞こえてくると、安堵と嬉しさにあわてて飛び出したものでございまして。

ああ、それから何年私はその音を待ちわびたことせう。苦難に満ちた年月が何時の間にか過ぎ、その頃二才だった長女が、今年の四月中学校の修学旅行で日向に旅立ちました。  
亡き夫と春の一日貝掘りし  
日向の海辺吾子の旅行く  
高鍋で生まれ、父の顔も知らない吾が子を見るにつけ、お母さんも一頑張りしなくてはと思う私でございます。  
大学まで出してやらむと子には言ひ  
吾が身思へり弱き我が身を  
父在さねば勤くあれよと子をさとし  
おのれをさとす淋しくもあるか

中野光義中尉 妻 知枝

・・・お父様のお葬式の時三歳だった子供も今は中学二年生になり、私は子供に支えられて生きる力を得て今日にいたつた。  
子を負いて遺骨受領に行きし日も  
今日の如く暑き日なりき  
迎え火をたけばとと様飛行機に  
乗つて来るかと吾子は問うなり

忘れられぬ人々

挺身第三聯隊長白井恒春少佐

この人は10期も先輩だが、高鍋における借家が隣だったので、家族ぐるみのお付き合いだった。毎朝声を掛け合つて、国道傍らの部隊のバス停まで行つた。飲めば愉快になる人で、箸で茶碗を叩きながら面白い歌を聞かせることが度々あった。



白井聯隊長 南サンフェルナンドの宿舎に入り寛いだところ

レイテ空挺作戦は、第二十六師団が脊梁山脈を越えてブラウエン地区に進出するので、挺進団はそれに先立ち、ブラウエン地区の三つの飛行場に降下占領せよ、というものだった。挺進団ではブラウエン北飛行場に聯隊長の指揮する二個中隊、サンパブロ飛行場に第四聯隊穂田大尉の指揮する一個小隊がそれぞれ降下するという計画を立てた。第一次挺進部隊は、12月6日ルソン島アンフェレス飛行場を発ち、夕刻

それぞれの目標に敵火を冒して降下した。既に夜になっていたが、聯隊長は数十名を掌握して地上にある敵機を破壊し、燃料を焼却して一時飛行場を占領した。その時聯隊長が掌握した中に副官と第四中隊長蓬田大尉はいたが、土屋少佐と第一中隊長松下大尉はいなかった。

後半夜第二次挺進部隊が降下する計画で、夜通しガソリンを燃やして待ったが現れなかった。翌日敵の反撃に遭



い、飛行場の確保は覚束ないので、南下して桂中隊を掌握しようとしたが、南飛行場に姿はなく、第二十六師団とも出会えなかった。その付近で度々敵と交戦して兵力を損耗し、18日に第二十六師団の重松大隊と遭遇して、敵が我が後方のイビルに上陸し、後方基地オルモックが危うくなったので、ブラウエン作戦は取り止めとなったことを知った。

その後、同師団の野中大隊とも一緒に



搭乗準備中 手前白井聯隊長  
むこう河野副官

になり、各部隊はカンギポットに集結せよという軍司令官の命令を承知した。これからが白井少佐の偉いところだと思う。降下したときからカンギポットに辿り着くまでの行動を、事細かく記録して後世に残してくれたことである。正に超一級の戦史資料であるとともに、戦死者の英魂を後世に伝えることにもなる。そして、これをカンギポットの軍司令部まで持参することに、死に勝る苦勞に堪えたのである。カンギポットに到着し、鈴木軍司令官に報告したのは1月26日、山中を潜行すること約40日、その間もちろん一物の補給もなく、木の実草の根を食い歩き続けた。物言う元気もない部下を励ますため、鼻歌を唄っていたという。

白井少佐はカンギポットに到着9日の2月4日に没せられるが、貴重な資料はレイテを脱出した第四聯隊の者によって持ち帰ることができた。

ここで、ブラウエン地区に対する空

**聯隊付土屋茂少佐**

この人は温厚な君子で、他人の言うことにはよく耳を傾け、怒ったことなど見たことがない。初めは第一聯隊の本部付で挺進部隊歴は一番古い。

ブラウエン北飛行場に降下し、数十名を掌握したが、聯隊長一行とは一緒になれなかった。夜間のことで、それが降下戦闘の実相だった。聯隊長はどうして知ったのか、その手記には土屋少佐の指揮する16名の行動という一項があり、飛行場に切り込んだ第十六師団の部隊と一緒に、大活躍したこ

挺作戦が取り止めになってからのことを、説明する必要がある。挺進第四聯隊は、一部を第一次挺進部隊として差し出したが、主力はブラウエン北飛行場に、第二次、第三次として乗り込むことになっていった。ところが、新たな敵がイビルに上陸してオルモックに迫る状況になったので、第四航空軍では待機していた第四聯隊をパレンシヤに降下させ、第三十五軍の増援に使った。この部隊はオルモック地区で大活躍するのだが、後に軍司令部がセブに脱出する時護衛となつて、斎田聯隊長以下76名がセブに渡った。この中に戦後帰還した者がいるが、第一次挺進でレイテに降下した者には一人の生還者もない。

とが記載されている(第十六師団は敵の侵攻前からレイテ島の防衛を担当しており、敵の攻撃で大打撃を受けたが、この頃残存部隊がブラウエン西北方の山中にあって、空挺降下と同時に北飛行場に切り込むことになっていた)。その後土屋少佐の指揮する者は73名にもなり、第十六師団の指揮下に入ったとも書いてある。最後はこの師団と運命を共にし、一人の生還者もない。

### 副官河野大尉

この人は降下直後から聯隊長の掌握下に入り、ブラウエン地区の確保を諦めた時、聯隊長の命令で、5名を連れて第十六師団との連絡に出た。途中敵と遭遇し、下士官1名が脱出して報告したが、副官以下は消息を断った。

### 第二中隊長桂大尉

レイテに向かう飛行中に操縦者海江田大尉(53期、桂の1期先輩)に次の歌を書いた紙片を手渡した。

あらわさんときは来にけり千早振る  
神に仕へし太刀のほまれを

この中隊はブラウエン南飛行場に降下することになっていたが、サンパブ口飛行場に降下したらしい。計画ではサンパブ口には穂田大尉の指揮する24名が降下することになっていた。とこ

ろが、米軍の記録によれば、250名が降下し、飛行場にあった工兵大隊や補給部隊はパニック状態になり、連絡機と燃料は焼き払われた。その後日本兵の大半は西方に移動し、飛行場に残っていた一部は、米軍の回復攻撃で最後は玉砕したとある。

桂中隊は降下目標を誤ったのを知りブラウエン方向に移動したものと想像するが、聯隊長の手記には桂中隊を掌握したとは書いていない。至る所敵地のだから何処で果てたのか判らない。

### 第四中隊長蓬田大尉

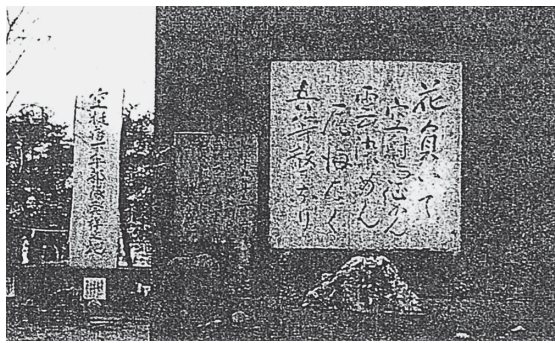
この人は降下直後から聯隊長と行動を共にし、共に苦労を嘗めカンギポットに辿り着いた。聯隊長陣没後は、残り少ない聯隊の兵を取り纏めていたが、衰弱甚だしく動けなくなった。先に述べたとおり第四聯隊長以下が司令部の護衛としてセブに脱出する時、同聯隊の第四中隊長香月大尉が蓬田大尉を連れて行こうとした。二人とも工兵出身で、香月が1年後輩である。蓬田は、聯隊長の死んだ所で死ぬと言って肯んじなかった。香月は戦後生還している。

### 挺進第三聯隊の将兵

ルソン島アンフェレスを出撃する前、この聯隊は南サンフェルナンドの

精糖工場を宿舎にしていた。12月6日第一次挺進部隊が宿舎を出て飛行場に向かった後、壁に次の歌が書き残されていた。

花負ひて空うち征かん雲染めん  
屍悔いなく我ら散るなり



川南護国神社の裏庭にこの碑があり土台に歌が刻まれている

第一次挺進部隊に含まれなかった衛生兵毛利義治は、この歌を手帳に書き留めておいた。ブラウエン降下作戦が中止となり、毛利衛生兵はルソン島で戦い生還した。戦後私にこのことを告げたので、世に伝えることになった。毛利君は既に亡い。

### 挺進飛行第二戦隊中隊長三浦浩大尉

第二挺進団が初めブラウエン地区の三つの飛行場奪取を命ぜられた時は、輸送機は挺進飛行第一戦隊の三個中隊しか持っていなかった。ところが、第四航空軍が要請したのか中央で判断したのか、内地にあった第二戦隊の一個中隊を第一戦隊に配属することになり、三浦大尉率いる一個中隊が遅れて追及した。

その頃レイテに向かう我が輸送船は、敵航空により甚大な損害を被っており、ブラウエン地区の三つの飛行場を奪取するのも、敵航空の活動を封ずる狙いもあった。その情勢を知った挺進団では、敵航空の活動を封じようとするならば、ブラウエン地区だけでなく、東海岸にあるタクロバンとドラックの二飛行場も降下目標に加えるべきであるという意見が、第四聯隊の中隊長連中の中から起きた。俺の中隊を使ってくれというのである。東海岸まで地上部隊が進出する計画はないので、敵飛行場を制圧できたとしても、最後は玉砕せざるを得ないことは承知していた。挺進団の意見を聴き、第四航空軍はタクロバン、ドラックの二目標を追加した。そこに向かう飛行隊に三浦中隊が選ばれた。



ブラウエン降下の絵 松本武彦画く  
遠方沿岸沿いに着陸しようとする三浦編隊

示した（海上に撃墜され浮遊中捕らえられた一操縦者の証言）。

**挺進第四聯隊榊原達哉大尉**

前述のとおり、私はこの動員前、下士官候補生隊長だったが、この時、聯隊から派遣されていた区隊長の一人に榊原中尉がいた。直情径行、気性は激しかったが、教育は極めて熱心、部下の人望も篤かった。

三浦大尉は53期、第二戦隊は18年9月から逐次に人員を充足して編成したが、三浦大尉は18年10月に着任した。私は、高鍋の将校クラブで一献酌み交わしたことがある。雪国の生まれと聞

いていたが、色白く温厚な人物とお見受けした。爆撃は戦場でも体験があるが、生きた爆弾を落とすのは初めてだなどと話したことがあった。

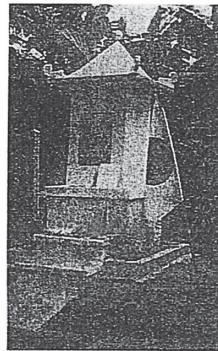
さて、アンフェレンス出発に当たり、レイテ湾には敵艦船もあり、その対空砲火を冒して飛行し、降下させることは不可能と判断し、立ち会った第四航空軍参謀の了解のもと、全機着陸と指

さされた。いよいよ戦場に臨み、主力から最も遠いタクロバンを攻撃する部隊を決める時、彼はその前に大尉に進級し、本部付になっていたが、真つ先に志願してその部隊の指揮官になった。同僚の誰もが彼の志願を当然と思った。かつて、彼の責任で殉職した8人の位牌を抱いて輸送機に乗り込んだのが最後の姿だった。

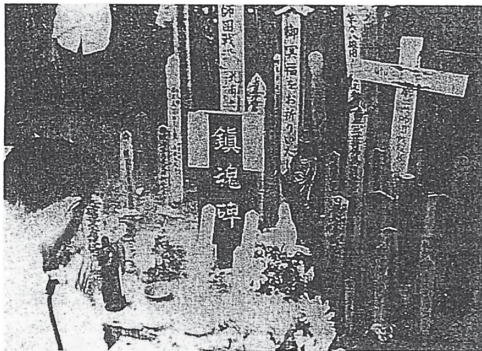
タクロバンとドラックに向かった者は、海上に撃墜され、捕らえられた者以外生存者はいない。

**挺進団司令部部員稲本宏少佐**

司令部動員時、強要して部員となつたこの人は、計画段階でレイテの地上の戦況を詳しく知ろうと思つたが、方面軍司令部でも航空軍司令部でもよく承知していない。そこで、自らレイテ



ブラウエンにある慰霊碑



ガンギポットまで行くのは大変なので山麓のマハンクラに慰霊碑がある

に先行することを具申し、補給品輸送の船団に便乗し、辛うじてレイテに到着し、第三十五軍司令部に出頭したが、その時は既に遅く、ブラウエンに対する空挺作戦は打ち切られていた。そこで、軍司令部の幕僚として活躍していたが、12月17日ファトンにおいて軍司令部が敵に急襲された時、衛兵を指揮して防戦し、戦死してしまつた。稲本少佐の活躍で、軍司令官や参謀達は東方の山地に通れることができた、と渡辺利亥参謀は戦後述懐している。

彼ならばと私は思う。

限られた紙面で全般の作戦経過の解説が不十分だが、あの苛烈な戦況下、私にとって忘れ難い人は以上のとおりである。

我がよわい温めゆかむ国のため  
語りのおさむこと尽きざれば

これらの人々は、靖國神社はもちろんのこと、かつて部隊の基地だった宮崎県の川南護国神社にも祀られている。毎年11月23日には、町長が祭主となって例祭が行われていて、私は何時も参列して、この人達の在りし日を回想している。

# 宮崎特攻基地慰霊祭

## ○御遺族からの便り

遺族会員（東京都）片瀬 昌美  
「前略御免下さい。」

私の父大井良美（海軍飛行予備学生13期）は、62年前の昭和20年3月27日未明、宮崎の赤江海軍基地（現・宮崎空港内）から、操縦士として爆撃機「銀河」に乗り、沖縄を目指して飛び立ちました。

私は、自分が還暦を迎えたときに、漸くその事実を知りました。それ以来毎年、4月に行われる「宮崎特攻基地慰霊祭」に参加させていただくことになり、今年で6年目を迎えました。

この特攻基地の慰霊碑は、数十年前、宮崎特攻基地慰霊碑奉賛会の方々が、全国から資金を集め、苦勞して、このような立派な慰霊碑を建立されました。この慰霊碑に刻まれた「鎮魂」の二文字は、見る人の心を深く捉えてやみません。慰霊碑をしっかり守って下さった方々も、今は年老いて、今年からは、宮崎市の皆様に慰霊祭の主催をお願いすることになりました。

春から秋に変わった宮崎特攻基地慰

霊祭は、戦没者慰霊祭として、宮崎市の皆様の温かい手へと委ねられ、毎年行われることになりました。

今年、平成19年度は、宮崎の特攻基地慰霊祭の節目の年になりましたので、お便りいたしました。会報に載せていただけたら幸いです。

平成19年10月29日  
片瀬 昌美  
財団法人特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会  
御中

## ○宮崎特攻基地慰霊祭便り

遺族会員（東京都）片瀬 昌美  
平成19年9月30日、菊花薫る初秋、宮崎特攻基地慰霊祭が、遺族、慰霊碑奉賛会会員、宮崎市職員等約200名が参列して厳かに執行されました。同慰霊祭は、これまで慰霊碑奉賛会が主催して執り行ってきましたが、会員の高齢化に伴い、その運営が困難となってきたので、今年からは宮崎市の主催により、戦没者慰霊祭として行われることになりました。

現在、宮崎空港のあるこの地は、旧海軍の特攻基地・赤江飛行場の跡地であり、同基地から出撃した若き戦闘隊

員800余名（うち特攻隊員は387名）は皆、沖縄を目指して飛び立っていきました。たった62年前の出来事なのです。ある者は、未明に、桜の花が咲き乱れていたであろう3月末、真つ暗な空の中で、自分の心と、どのように向き合っていたのだろうか、ふと思うのです。慰霊碑として建立されたこの巨大な石碑に刻まれた力強い「鎮魂」の二文字は、見る者の心をぎゅっと掴み、じわじわと絞り上げてきます。

「このような形で（特攻隊員として）、こんなにも多くの若者を死に向かわせた、あの戦争をどうか許してほしい」、そんな悲痛な思いが伝わってきます。宮崎特攻基地奉賛会の皆様が建ててくださった、この鎮魂碑は、本当に深く心に残る慰霊碑です。

参列者一同、碑前に深く頭を垂れて黙祷し、全員献花をして御冥福を祈りました。

奉賛会から宮崎市へと、スムーズに移行された、この特攻基地慰霊祭は、これからもずっと、ずっと、宮崎市の皆様の温かいお気持ちに支えられながら、毎年行われることとなり、ほんとに安心いたしました。時が移り、主催者が変わろうとも、人の心は変わららず、戦没者への哀悼の気持ちは永遠であると確信した、今年の慰霊祭でした。

鎮魂碑で筆者





### 明野忠魂塔慰霊祭

#### — 加藤隼戦闘隊長の木像

#### 62年振り奈良から里帰り—

評議員 水町 博勝

秋の晴天に恵まれた10月12日、陸上自衛隊明野駐屯地内「忠魂塔」前において慰霊祭が執り行われ、会長代理として初めて参列させていただいた。

陸海軍の基地を引き継いだ自衛隊の部隊が、基地内で執り行う代表的な慰霊祭と聞いていた。陸軍明野飛行学校ゆかりの戦没者1600余柱と共に陸上自衛隊航空学校の殉職者15柱が合祀されている「忠魂塔」の前に、参列者約300名が集い、厳かに慰霊の祭典が執り行われた。

祭典は国歌斉唱に始まり、儀仗(黙祷)の後、学校長兼駐屯地司令鎌田正広陸将補並びに忠魂塔顕彰会谷口正義会長がそれぞれ追悼の辞を捧げ、次いで献花が行われた後、伊丹の中部方面音楽隊による追悼演奏で、抜刀隊・空の神兵・加藤隼戦闘隊・故郷・同期の桜の5曲が演奏されたが、折しも上空には、OH6編隊の追悼飛行が繰り広げられ、終わって再び儀仗(黙祷)、弔銃と、祭典は厳肅かつ斉整と行われた。戦前・戦後、同基地が結ぶ慰霊継承の誠を強く心に刻むことができ、感

銘深いものがあつた。

第一次世界大戦後、航空戦力の重要性が増し、明野は陸軍飛行学校としての25年間で、航空戦闘隊の総本山として、不惜身命・見敵必殺の航空戦士を育て、各種の調査研究を行い、陸軍の航空兵科が独立してから20年の短い期間ではあつたが、陸軍の戦闘パイロットはこの地で育ち、戦闘隊のメッカでもあつたし、現在もその遺訓・遺徳を継いでいる地でもある。

筆者は、航空自衛隊のOBでもある関係で、かの軍神加藤隼戦闘隊長も昭和7年から4年間で、陸軍明野飛行学校の教官として在職されたこと、また、戦後、航空は、新たな軍種として航空自衛隊を発足させてより52年を経過した今、その創設時に、陸海軍の航空に携わった方々が尽力されて、その伝統を継承してこられたが、その結果、遺訓を偲ぶ品が、当地と航空自衛隊とに二分されて保管されていることを知り、改めて感慨深いものがあつた。

それは、高潔な人格と赫々たる武勲を仰がれた加藤隼戦闘隊長の木像6体のことで、そのうち小3体は明野に、等身大の1体と小2体は奈良市の航空自衛隊幹部候補生学校にそれぞれ保管されているということである。

航空の幹部候補生は、戦史の一つと

して、加藤飛行第64戦隊長、大東亜戦争の初戦において、中南支・仏印・マレー・ビルマ・インド・スマトラを転戦し、戦闘隊の撃墜機数二百数十機に及ぶ戦果を上げ、ベンガル湾上空で戦死された加藤少将の戦訓を学んでいるが、それによって、戦闘における対戦闘機戦、爆撃・空挺降下の援護を含めて、制空権の確保は必勝に繋がることを教育されている。

広報班長の山下三等陸佐によると、奈良にある加藤隼戦闘隊長の木像は、今回の慰霊祭に合わせて62年振りに明野の広報館に里帰りしたとのことであり、その像(写真参照)は、鍛え抜いた頑強な体と鋭い眼差しに、秘められた威風が伝わってくるものであつた。



明野忠魂塔慰霊祭



慰霊祭献花(中央・特攻協会)



里帰りした加藤隼戦闘隊長の木像

### 神風特別攻撃隊敷島隊員

### 谷 暢夫一飛曹の思い出

元201空整備員

河辺 勇

私は、昭和16年1月、呉海兵団に入隊、4月に宇佐空配属になり、18年12月に201空に転属、零戦整備員となった。トラック、サイパン、ペリリューを経て19年6月にセブ島に移駐した。

昭和19年9月12日、セブ飛行場は米軍機の空襲を受けた。10月14日レイテ海戦に備えて、ルソン島クラーク地域への移動を命ぜられ、私は関大尉以下5機編隊の3番機(分隊長谷一飛曹)の操縦席の後ろに乗り込んだ。

クラークでは、兵舎の一部屋に4人(谷一飛曹、中野一飛曹、永峯飛長、大黒上飛)と一緒に起居し、私は毎朝4時に起きて、零戦の油圧を上昇させる作業に従事した。一番早く201空に転属して来た谷一飛曹には可愛がられて、色々と航空糧食も分けて貰ったことを思い出す。

数日後、私は明朝内地から来る一式陸攻に乗って帰国せよとの命令を受けた。その事を谷さんに話すと、4人の方から餞別や煙草(ホマレ)を頂戴し

た。陸攻は着陸して給油をしたら直ぐ離陸するから、今夜中に支度は済ましておくようにと、誠に慌ただしいことであった。

別れて直ぐ、関大尉以下5名は、敷島隊と命名されて、10月20日の西マバラカット飛行場出撃以来4回目的、10月25日7時25分に東マバラカットを飛び立って、漸く米機動部隊を捕捉し、空母撃沈1、同大破1、同小破2(米軍資料)の、赫々たる戦果を上げて散華された。

ここに改めて、関大尉以下5勇士の冥福を心からお祈り申し上げます。内地に戻って、秋水の完成が遅れていたで、明治空の監督官となり、三菱からの納入機の試験飛行に当たった。

昭和20年3月19日に静岡に移って、栄エンジンの整備について勉強を重ねた。5月末から追浜で秋水整備を担当することになった。秋水に関しては、別途稿を改めて報告することにした。

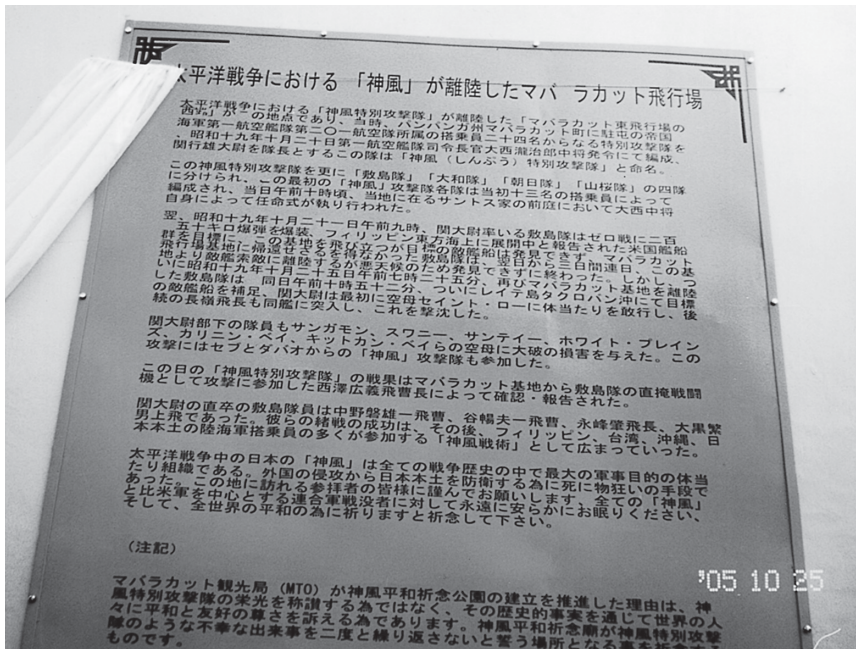
終戦になり、秋水に関係した者は米軍に呼び出されるであろうから、住所不明にしておくので、直ぐ復員しろと申し渡された。そのために、私は戦後50年余り軍籍不在の状態でごすことになってしまった。

9年前に201空戦友会から連絡があり、色々と知ることになり、平成17年の当協会のフィリピン慰霊行に参加することができた。東マバラカット飛行場跡の第二次神風記念碑(神風神社)に、特攻勇士の像も建立されて、一通り形が整った直後で、平成17年10月25

日の慰霊祭開催に先立って、改修された説明板の除幕式が行われ、私も除幕の紐を引く一人に選ばれた。現地に行くと、敷島隊について初めて

知ることが多く、敷島隊長関行男大尉が、故郷の伊予西条に祀られていることを知り、一昨年と今年(注:平成19年)の2回霊前に額ずいてきた。

最後に谷さんの遺言を記す。「何一つ親孝行できなかった私も、最初に最後の親孝行をします。ご両親の長命を切に祈ります。」



平成17年10月25日除幕された説明碑文

# 「俺は、君のためにこそ死にいく」を見て

少飛9期 中曽根 慶蔵

## まえがき

平成19年4月24日、東京・有楽町の国際フォーラムで、映画「俺は、君のためにこそ死にいく」(以下「俺は、君の：」と略記する。)の試写会があった。12期の岡崎義範さん(前少飛会会長)と中村成勇さん、15期の橋本正男さんと私の4名が招待者として入場した。それと9期の故池田芳彦君の次男道彦さんと次男の奥さんも招待された。

知覧の鳥濱トメさんと特攻隊員たちを語るこの映画については、本会報第72号にDVDの予約受付の用紙が同封されていた。5月12日、全国で一斉に上映され、マスコミでも大きく取り上げられたので、既に会員の方及び関係者の方の多くがご覧になられたと思う。

映画の製作総指揮・脚本の石原慎太郎氏の「特攻と日本人」という記事が『文藝春秋』平成16年9月特別号に掲載されている。石原氏がトメさんと隊員たちに寄せる深い思いが読む人の心

に強く伝わってくる。石原氏は、この思いを日本人に広く深く知ってもらいたいと考え、映画監督の新城卓氏と共に8年の構想を経て、映画の製作に着手したとのことである。

鳥濱トメさんの次女赤羽礼子さんと石井宏氏との共著『ホテル帰る』が多く読まれている。本の「第一章少年飛行兵」中に、大刀洗飛行学校知覧教育隊のことが書かれていて、5人の助教が出てくる。彼らはよく富屋に行ったようで、トメさんに可愛がられて、トメさんを「小母ちゃん」と呼んでいた。

5人のうち特に池田芳彦、川畑三良の両君が富屋の人気者だった。その後5人は戦隊に転属して、3人が戦死し、池田、川畑の両君は復員できた。池田君は、一〇五戦隊で活躍し、最後は沖縄作戦で、爆装した飛燕で特攻機の誘導などをしていて終戦となった。九州の出身で税務署員となり、鹿児島やその他の税務署に勤務したので、時々懐かしい知覧を訪れて、トメさんと当時の思い出話をしていたと思う。彼は東京に転勤し、その後独立して税務会計事務所を開いた。

この池田君のことを知った映画関係者は、事前の調査として、彼に会って色々話を聞いた由、しかし、彼は平成19年1月に他界した。映画の完成を見

ずに逝ってしまった残念だった。赤羽礼子さんも平成17年10月他界しているので、残念な思いが重なる。

## 映画の感想

映画は2時間21分の長編で、深い感情を受けた。書きたいことは多くあるが、特に感じたことを次に述べる。

○トメさん役の岸恵子は好演、適役だったと思う。石原氏が特に岸恵子さんに頼むことを考えていたように正解。しかし、不適だったとの意見もあるようだ。

○特攻隊員の心情も良く表現されていた。私もビルマで特攻編成され(九七重機関係として)、いざ出撃命令がきいたら飛び立つ心構えを固めていた。しかし、知覧の隊員たちとは、周囲の環境が大分違うので比較を考えてみた。それは、知覧の場合、周囲に若い女性が多くいて、接触も多様である。そういう多情な中から出撃する隊員の心中はどんなものだろう。後ろ髪を引かれるという言葉があるが、強い引力を振り切った出撃で、さぞ辛かったと思う。その点ビルマでは、周りに日本人の女性など全然いなかったもので、生への執着が少しは軽かったのではと思う。

○製作費5千万円掛けた実物大の集

(単排気管・三型甲)2機は良く出来ている。セスナ機のエンジンを搭載しているとのことで、プロペラが回転しての地上滑走の様子など素晴らしい。

○飛行帽、飛行服、作業服なども良く再現されている。東京・上野に軍装品店の中田商会がある。1階には、復刻の軍装品が所狭しと陳列されている。

2階には、本物の軍装品や小型兵器が多く陳列されている。ただし、本物は販売していない。映画の軍装品はこの中田商会から提供された。米映画「硫黄島からの手紙」で使用されている軍装品も、中田商会製とのことである。

○飛行服の右胸に着けている少尉の階級章が左右逆になっている隊員が何名かいた。一つだけの星は、体の中央側が正規だが、それが外側になっている。中田商会製の階級章を布に取り付ける

とき、左右逆に服装係が取り付け、それをそのまま安全ピンで胸に着けたと思われる。映画撮影中誰も気が付かなかったことは、私には不思議に思えて残念である。このことは、映画を見る前にパンフレットなどの資料を見て、既に気が付いていた。しかし、映画の中では階級章の逆はほとんど気にならなかった。

○映画の題名の「君のために」は我々旧軍人には引掛かる言葉である。

昔「君のために」と言えば、「天皇陛下のために」となる。本映画では先ず、「俺は、」が「君のため」の前にくるし、君とは肉親、親しい近くの人（特に女性）などが対象であることは予想がつく。映画の中では、トメさん始め多くの「君」が登場する。それらの人々に別れを告げ、開聞岳を飛び越えて沖繩を目指した隊員たちの心中を思い、胸が痛む。題名を狭く解釈すると「君」は特定の人になるが、映画を見た印象では、特定の範囲が拡大して、同胞、そして日本国民全部になっている。「天皇陛下」という言葉や映像は全然なかったと思う。したがって、「俺は、君のためにこそ死にいく」と言い換えを暗示しているように思えた。

○映画が始まって間もなく、白い体操服の若者たちが、掛け声勇ましく駆けてきて富屋食堂になだれ込み、トメさんから歓待を受ける場面がある。これは、大刀洗飛行学校の知覧分教場に最初に入学してきた十期生たちである。特に説明がなかったもので、一般観覧者は特攻隊員たちと思ってしまう。この知覧の十期生の中に、私の親戚の中曽根康治君がいた。彼も在校中富屋によく行ったのではないか。私がビルマのラングーンの飛行場宿舎にいた時、彼が突然訪ねてきた。加藤隼戦闘隊に赴任してきて、戦隊の九期の者が中曽根姓を知って、飛行班にも中曽根がいると教えられたようだ。再会を喜び、その後何回か会ったが、インパール近くのパレルで戦死した。加藤戦隊には、20数名の十期生がきたが、最後に残ったのは、多分2〜3名である。同じ戦死でも、世間は特攻隊員に関心が深い。他の多くの戦死者にも機会をとらえて追悼顕彰に努めなければならぬ。

○特攻機が敵艦を攻撃するシーンは、残存する実写フィルムやCG特撮の場面もあるが、フィリピン海軍の協力を得て、実際に米軍が使用していた駆逐艦や掃海母艦を用いての戦闘シーンは迫力があつた。特攻隊員と周りの人との多情な交流場面が続いた後、一転して轟音飛び交う苛烈なる突入場面になり、圧巻である。

○映画の最終クライマックスになる特攻平和観音堂に通じる平和公園の桜並木の場面も素晴らしかった。老いた車椅子のトメさんを、生き残った背広姿の振武隊長中西少尉（陸士卒）が車椅子を押して静かに進む。日が落ちて薄暗い中、満開の桜が咲き誇り、両側に灯籠に照らし出されている。前方に散華した隊員たちが群れをなして現れ、笑顔で何か叫んでトメさんに語り



掛ける。そして、やがて消え去り、啜が変わって現れて消えてゆく。感動して呆然と見守るトメさんと中西隊長の顔があつた。石原氏と新城監督の、この映画に掛けた全情熱がここに結集したような感じを受けた。

○特攻隊がなぜ結成されたかについて、生みの親である大西瀧治郎中将が登場する。絶望的な戦勢を挽回しようと、非常手段として体当たり攻撃を中將は考え、先ず関大尉に白羽の矢が立った。大尉が頭を数回掻きむしり、

この突飛な万死攻撃を理解し受諾する様子が、上官の前での部下の行動としては特異に見え、印象的だった。これは実際にあった行動のようだ。

終戦の詔勅が下り、中将が自刃する壮烈な場面もある。多くの若者を特攻に送り出した責任を、中将はこのように取ったと、映画は訴えている。

#### あとがき

○「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」などの米映画、「出口のない海（回天特攻）」公開に続いて「俺は、君の・・・」が上映され、そして、米映画「特攻」（日系女性監督、神風特攻隊の映像資料や生存者の証言）も上映された。TVでも終戦日近くなる等多くの戦争関連番組が放映された。それらのものは、これまで同様海軍ものが多い。その中で、今回の「俺は、君の・・・」は、我々少飛にとって大きな関心のあつた知覧の映画であつた。

「鳥濱トメさん」「陸軍特攻、少飛、隼・・・」などのことが、本映画により広く多くの今の人たちに、特に若者に知ってもらえたことは有り難い。石原氏、新城監督、製作関係者に改めて感謝申し上げる。

○試写会には、映画ファン、製作関係者、製作協力者など1300名が入場

していた。少飛は岡崎、中村、橋本の3名が協力者として招待されたが、私は協力はしていなかった。橋本さんに頼んで割り込ませてもらった。知覧の「なでしこ会」の方々もいたようだった。

映画が終わってから、出演者の挨拶があるというので見ていると、石原氏や新城監督、岸恵子、主な出演者ら9名が舞台上に立ち、それぞれ挨拶をされた。

○平成18年の少飛十二期会報に、岡崎さんの「初年兵教育」記事があり、悪戦苦闘の映画製作協力状況が述べられていた。また、産経新聞に、橋本さんを取材した「映画に重なる自らの青春」という記事があった。「撮影に協力・元特攻隊員橋本正雄さん」として、橋本さんの写真と復刻の筆の写りが出ている。

○「俺は、君の・・・」のロードショーは、通常の映画と同じく2カ月位で中止になった。見たいと思っているうちに上映中止となって残念に思っている方も多いと思う。幸いDVDが10月21日に発売されているので、近くの店で入手できると思う。私が入手したDVDは、特別限定版(初回生産限定)で、2枚で構成されている。1枚は本編(公開映画)、2枚目は、ボーナスディスク

と称され、235分の大きな容量の映像特典が収録されている。その内容を同封されていた資料により転記すると、

・メイキング映像(自衛隊での本格的な訓練風景やフィリピンでの迫力あるロケ風景など、壮絶な歴史的大作の撮影現場に密着ドキュメント)

・真実の証言(元特攻兵や元奉仕隊の人々、「特攻の母」鳥濱トメさんのご親族など、実際に特攻に関わった人々による「真実」の証言集)

・壮絶な特攻シーン〜VFX完全解説。

・その他7項目あるが省略。

真実の証言では、生き残った特攻隊員2名が証言している。

①板津忠正さんは、出撃したが機体不良で不時着し、生き残った。戦後全国を回り、隊員の慰霊を行うとともに、遺品を集めて特攻遺品館を建て、次いで現在の知覧特攻平和会館の建設に尽力し、初代の館長に就任した。

②山田忠男さん(少飛13期)は、4機で出撃して敵艦上空に到達するも、天候不良のため敵艦を発見できず、隊長機を見失って3機で喜界島に不時着し、その後グラマン機の攻撃により愛機は炎上した。隊長機は遂に帰らず、残った2機は出撃して散華した。

涙ながらの証言は、見る者の胸に迫り、当時の状況を想像して強い感銘を受けられる。

お二人の体験談は、映画製作に生かされて、映像として再現された。

○平成元年の同期大会が鹿児島であった。その時知覧に行き、富屋旅館で鳥濱トメさんの話を聞いた。写真のように、車椅子のトメさんがマイクを持って、ホテルとなって宮川軍曹が帰った話をされた。池田芳彦君が隣に立っている。ホテルの話は、今日では知れ渡っているが、その時は我々は初めてなので、感心してトメさんの話を聞いた。



○パソコンの映画作品情報で「俺は、君の・・・」についてどのように評価されているかを調べた。多くの人が投稿している興味深かった。投稿者は若い人が多く、女性もいる。概ね評価は良く、この映画が多くの若者の関心を引き、鑑賞されて、トメさん、知覧、特攻、当時の国民の心情などについて、自分の意見を述べている。中には石原氏に対する厳しい評価もある。

○この映画は、我々にとつては貴重な映像と思うが、今の日本人、特に若い人が「君のためにこそ死にいく」について、特攻死したらどうして君のためになるのかを考え、自分を取り巻く多くの君→同胞たち→祖国、そして、愛国→護国と考えが進むことを願う。

石原慎太郎氏の隠れた意図が、ここにあるのではないかと思いつながらこの稿を結ぶ。

### 追記

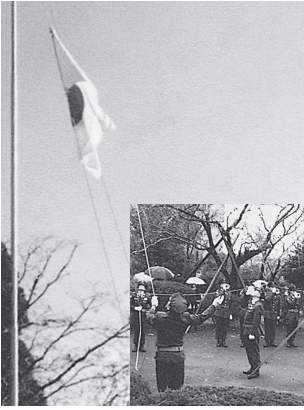
本稿は、少飛第十六期生会会報(平成20年3月発行予定)に投稿した記事に、若干の訂正及び追加を行って、本会報に投稿した。転載については、予め本協会及び少飛第十六期生会のご了承を頂いたことを追記する。

## 川南護国神社例祭参加

田中 賢一

平成19年11月23日、例年通り行われた。この神社の創立のことや毎年のお祭については、既に度々掲載したので重ねては述べないが、特異なことだけ紹介する。

- 一 御祭神は、同村出身の戦死者は六三四柱である。ところが同村に基地があった陸軍挺進部隊の戦死者一万二千柱も合祀されている。
- 二 奉賛会会長は町長（戦後町になった）で、祭主は町長とし、運営一切は町役場の職員が担当している。
- 三 町を挙げての祭典であり、受付は学校区ごとに設けられている。
- 四 祭典に花を添えるのは、中学校女生徒の神楽舞である。
- 五 国旗掲揚は、都城自衛隊の隊員が行う。



参列者は約三百名、かつては挺進部隊生き残りの老兵達が大勢参加したが、追々少なくなり、本年は私を入れて僅か三名になってしまった。しかし、習志野の空挺団、県下の都城及びえびの陸上自衛隊、更に新田原の航空自衛隊からも代表が参列し、また、全国空挺同志会会員が遠くは山形からも参加してくれた。それらの人は、自衛隊の空挺隊員だった者である。

例年通り私は御祭神の戦友として、次の一文を奏上した。今回は御霊に申し上げるよりも、参列者一同に陸軍挺進部隊の戦歴を知ってもらうことを意識して文章を作成した。

## 追想の言葉

ここに鎮まる陸軍挺進部隊の戦死者の御霊に申し上げます。我が部隊の辿った跡を顧みまするに、開戦と同時に挺進団を編成し、南方に向かいました。パレンバンで作戦は眩いばかりの勝利で緒戦を飾りましたが、蒲生中尉以下三十六柱が靖國の神となられました。次いでビルマに行き、ラジオ作戦では天候に妨げられ、目標の直前で引き返しましたが、副島中尉以下二機の搭乗員を失ったのは残念至極でした。内地帰還後昭和十七年七月、宇都宮飛行場で天覧演習の光栄に浴しました

が、松浦軍曹は陛下の御前で、不開傘事故により殉職し、護国の神となられました。その頃より戦局は追々と攻守を替え、我々の出番はなく、ひたすら訓練に励みましたが、二年有余の間数件の殉職事故がありました。中でも残念だったのは、演習中小丸川を渡渉しようとして伊藤中尉以下八名が殉職したことでした。

いつ征くか

いつ散るのかは知らねども

今日のとつとめに我は励まん  
それが当時の将兵の気持ちであり、小丸川の殉職碑にもこの歌が刻んであります。

昭和十九年に入り戦局はいよいよ非となり、十月二十日敵がレイテに上陸するや、第二挺進団に動員が下令され、二千の精鋭が比島に向かいました。高千穂の名で呼ばれたこの部隊はレイテに降下し、一部はネグロス島に向かい、残りはルソン島で戦いましたが、如何に精鋭であっても戦勢を覆すことは出来ず、白井聯隊長以下大半が国に殉ぜられました。

花負ひて空うち征かん雲染めん

屍悔いなく我ら散るなり

南サンフェルナンドの宿舎の壁に書き遣されたのはどなたですか。

高千穂部隊と少し遅れ、挺進集団の

滑空機搭乗部隊がルソンの戦場に加人しましたが、大廈の覆らんとするや一臂の支え得る能わずで、すべてが悲惨な結末に終わりました。中でも無念だったのは、空母雲龍に搭乗した滑空歩兵第一聯隊等の部隊で、敵潜水艦に撃沈され、輸送指揮官面高少佐以下千数百名が水漬く屍となられました。

日本空挺戦史の最後を飾ったのは、沖繩作戦の末期に行われた義烈空挺隊の特攻作戦でした。航空特攻を成功させるため敵飛行場を一時押え込もうと、生還の見込みの全くない特攻でした。奥山中隊長以下一三六名と第三独立飛行隊諏訪部隊以下三二名が重爆一二機で健軍飛行場を発って沖繩に向かい、途中故障等で四機が不時着しましたが、両隊合わせて一二三名が悠久の大義に殉ぜられました。

英霊と我らが歩んできた陸軍挺進部隊四年半の歴史は実に多彩でした。栄光と悲惨、歓喜と失意、躍動と隠忍、その間にあって一万余の英霊と我々は幽明を訣ってしまいました。我ら老耄史実を後世に語り伝えることを畢生の任といたしております。ここに在りし日の英姿を偲び一文を捧げました。地元御出身の英霊に申し上げます。我らは今述べた通りの戦歴の根底はこの土地にあります。川南は心の故郷と

も言うべきで、あなた方御祭神は皆はらからと心得ております。まほろばの里に生れにし神々のいさおし偲び合はすたなうら



地元出身の御祭神を偲び我々が献納した100号の油絵



町の商店街は幟を掲げている

第40回豫科練戦没者慰霊祭

小倉 利之

平成19年11月11日(日)、財団法人海原会主催による表記の慰霊祭が、豫科練揺籃の地、旧土浦海軍航空隊(現陸上自衛隊武器学校)の敷地内にある雄翔園の「豫科練二人像」碑前において、盛大に執り行われた。

本年は、財団法人海原会設立30周年に当たり、また、豫科練慰霊碑保存顕彰会結成以来第40回目の慰霊祭執行という節目の年に当たするため、取り分け大勢の同窓生が全国各地から参集して多くの遺族の方々をお迎えし、先の大戦で祖国の危急を救わんがため、身を挺して散華された同窓戦没者約一万九千柱の御霊安かれと祈念した。

この日は、前日から降り続いた秋雨も、「日の丸飛行隊」の慰霊飛行が実施される頃には止んで秋空が戻り、慰霊祭に相応しい天候となった。

慰霊祭式典は、陸上自衛隊の絶大な支援と、海原会実行委員会の周到な準備によって滞りなく進められた。

国旗掲揚に続いて陸上自衛隊勝田駐屯地音楽隊による国歌吹奏、祭壇に献火、武器学校教導隊員による弔銃斉射



豫科練二人像碑前慰霊祭

により式典は開始された。

まず、高松宮妃喜久子殿下の御歌「海はらに はたおおそらに 散華せし

きみら声なく いく春やへし」が、茨城県吟剣舞道総連盟真中義雄副会長によって奉詠された。

海原会松井房一会長は式辞(代読)で、次のように述べられた。

「敗戦により一時虚脱感に陥った国民は、敗戦の混乱期から決然と立ち上がり、廢墟と化した国土を復興させ、嘗々努力を重ねて世界に類を見ない高度成長を成し遂げ、今日の恒久平和を確立いたしました。これ偏に英霊各位の無



若鷺の歌碑

言の御加護によるものと、唯々感謝あるのみであります。今ここに改めて慰霊の誠を捧げ、感謝の意を表し奉ります。」

次いで、同窓生を代表して海原会の藤野雅之理事が追悼の言葉を捧げ、来賓として武器学校校長福田裕陸将補が、遺族代表として東京甲飛会新井四継会長が追悼の辞を捧げた後、来賓・遺族・各会代表以下参列者全員が献花し、参列者全員で「若鷺の歌」を奉唱した。

「若鷺の歌」は、西條八十作詞、古閑祐而作曲で、余りにも有名であり、豫科練出身者でなくても口ずさむことがあるが、一番から四番まで、豫科練出身者そのものを歌っており、参加海

原会会員は、その通りの人生を送ってこられたものと推察する。

その後、奉納行事として、陸自音楽隊による演奏と地元婦人会有志による舞踊が捧げられ、慰霊祭は滞りなく終了した。

その後、直会は、会場を例年通り武器学校体育館を借用して実施され、謝辞、来賓祝辞、乾杯に引き続き、会食に移った。

セレモニーの初めは、武器学校隊員有志による勇壮な「常陸陣太鼓」である。日頃の訓練の成果を十分に発揮し、

出席者全員から盛大な拍手を浴びていた。直会の終盤には、台湾から参加した豫科練出身者とその関係者の中から歌姫が日本語で三曲を独唱するなど、楽しい一時を過ごすことができ、直会・懇親会は無事終了した。

今回の記念すべき慰霊祭も、陸上自衛隊の支援と実行委員会の献身的な努力により、立派に実施された。豫科練出身者の生ある限り続くであろう慰霊祭、次回も戦没英霊の慰霊、顕彰をよろしくお願いいたします。

「編注：財団法人海原会は、予科練（海軍飛行予科練習生）出身戦没者の慰霊顕彰を主要業務として、昭和52年に設立された厚生労働省所管の認可団体で

ある。構成員は、甲種飛行予科練習生出身者で構成する「全国甲飛会」とその会員、乙種飛行予科練習生出身者で構成する「雄飛会」とその会員、乙種特別飛行予科練習生出身者で構成する「特飛会」とその会員及び丙種飛行予科練習生出身者で構成する「丙飛会」とその会員、遺族、一般等で、予科練同窓生の総合団体であるが、会員の老齢化が進み、物故者が出るなどとして、会員数は年々減少の傾向にあり、現在約3千名となっている。

予科練は、昭和5年、航空機搭乗員拡充の採用源として、少年時代から確りとした基礎教育を行い、優秀な初級士官搭乗員を養成する方針の下、少年航空兵制度が発足し、同年6月、全国の志願者6千余名の中から74倍という難関を突破して79名が合格。横須賀海軍航空隊に入隊し、新設の予科練習部の教官、教員によって教育を開始したのが最初である。

次いで、昭和11年末「航空科」が「飛行科」と改正されたとき、「海軍予科練習生」は「海軍飛行予科練習生」と改称された。

昭和12年からは、航空軍備の大拡充が行われることになり、従来の予科練習生制度では、量的、時間的に間に合わない見込みとなったため、中学校4

学年1学期修了程度の者を採用し、より短期的に尉官代用搭乗員を養成する制度が採用され、昭和12年9月1日にその第1期生が、横須賀海軍航空隊に入隊して教育を開始した。

この制度の採用により、従来の予科練習生を「乙種」とし、新制度の予科練習生を「甲種」とした。

新制度の発足と将来の見通しから、これまでの施設では狭隘となるため、昭和14年3月1日に霞ヶ浦海軍航空隊に移転した。したがって、追浜の横須賀海軍航空隊に入隊した期は、乙種が第1期から第10期まで、甲種が第1期から第3期までで、霞ヶ浦空に移転したのは、乙種第8期、第9期、第10期と甲種第2期、第3期であった。

その後、期を追って大量採用となつて、三重、鹿児島に、次いで昭和20年の終戦までには、19の予科練教育専門の練習航空隊を設けた。

予科練は、創設以来終戦までに25万余名の練習生が入隊したものの、その1割近い練習生が卒業し、終戦時の在隊者は、22万余名であった。卒業生の7割近くが戦没され、戦没者の約4割が特攻兵として散華された。その御霊は、1万8540余柱に及ぶ。（甲飛だより「第81号より」）



平成19年度

フィリピン慰霊巡拝旅行所見

評議員 衣笠 陽雄

平成19年10月24日から26日の間、当協会恒例のフィリピン特攻隊関連慰霊巡拝旅行に参加した。平成12年以来実施された特攻隊進基地慰霊巡拝旅行の一巡に伴い、今年から規模縮小ということ、当協会代表2名(深山理事・衣笠評議員)による2泊3日の短期間の慰霊巡拝旅行であったが、私にとっでは初めての現地慰霊祭参加であったので、特攻隊の出撃現場、現地の慰霊祭の状況等を確認でき、現地でなければ体感できない経験をしたことができた、有意義な巡拝旅行であった。初心者ながら若干の所見を述べさせていただきます。

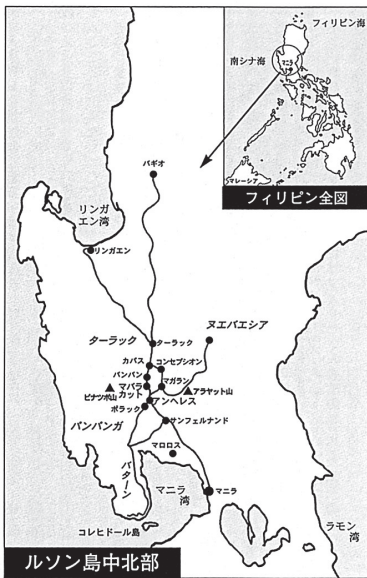
○戦没者慰霊祭参加

(平和観音法要、特攻隊戦没者慰霊(クラーク特別経済区リリーヒル))

慰霊祭は、地元州観光局によって行われているが、「特攻隊の慰霊祭の主催が何故日本人ではなくフィリピン人なのか？」が出発前の素朴な疑問であった。確かに経済的な面からは、日本人がお金を出して観音像を建て、管

理費等も日本からの参拝者が寄付をしているということや、慰霊旅行者からの観光収入も含めて、経済的恩恵から現地の市が積極的に支援しているという事情も否めない理由であろう。しかし、現地で色々見聞すると、そのほかにも特攻隊が受け入れられている理由があることに気が付いた。皮相的、一面的な見方であることをお許し願いたい。一つは、デイソン氏のような現地の有力者が、特攻隊の国に殉ずる崇高な精神に心服し、この精神をフィリピンの国興し、就中、教育に活用しようとしているのではないかと考えている。フィリピンは人口8千万と言われるが、子供が非常に多く、人口ピラミッドは三角形である。日本は人口1億2千万であるが、高齢化社会であり、人

口ピミッドは逆三角形である。マニラの街中を車で通ればその差を実感できる。フィリピンは日本と違い、これから発展する若い国であり、心ある人は教育の重要性を認識しているはずだ。特攻隊の自らは国に殉じた行為は、彼らに為は、彼らに国に殉じた行為は、彼らに国に殉じた行為は、彼らに



特攻隊戦没者慰霊祭式場全景

は最悪であったのは当然としても、時が経って落ち着くと、フィリピンの対日感情は中・韓のそれとはかなり違っているように見える。ガイドや大西神社での現地人等の話では、旧日本軍は民間人に対してそれほど悪いことはやっておらず、共生の形で仲良くやっていたので、日本軍を悪く言う人は、中・韓とは比較にならない程少ないという。戦中のフィリピン民間人の犠牲者の多くは、米軍の爆撃によるものだが、そうだし、バタンの死の行進も、見込み以上の捕虜を抱えた結果の仕方ない処置で、それも米・比両軍兵士に対するもので、民間人には影響がなかったという。ただ、バタンガス州で、教会内に村人を押し込んで殺害したという残虐行為があり、その地方では最近まで反日感情がとてつもない所だったそうである(デイソン氏の著書にもあるが、米・比戦争の時の米軍の方がもっと残酷だったとする見方もある。戦争とはそういうものだ、とまで氏は言っている)。そういう例外を除いて、思っ

悲惨な大規模地上戦がなかったこと、政治の抗争手段として用いられなかったこと、特に中・韓のように戦争中のことを戦後それ程政治的に利用されなかったこと、フィリピン人の民族性等が原因であろう。そのような背景の上に、デイソン氏のような特攻隊を理解し、評価してくれる人がいたからこそ、住民に特攻隊の精神が受け入れられたのではないかと思う。それは取りも直さず、特攻隊員の行為が、人間を超越した神の様な気高さから来る崇高さ、偉大さが極めて大きな影響を及ぼした結果と言えるだろう。

日本で特攻隊の精神を教育に取り入れるなど、今は夢の話であるが、このフィリピン人の活動を逆輸入し、宣伝してみるのが効果的かもしれないと思う。

### ○特攻隊慰霊碑参拝

(クラーク東飛行場跡)

バンバン川西側のリンガエン街道に面する東飛行場跡地に、コンクリートの鳥居と立派な特攻隊員像のある特攻神社がある。デイソン氏がマバラカット市観光局の協力を得て、1974年に建設した特攻隊記念碑が、1991年のピナツボ火山の大噴火により碑の上部15cmを残して埋没した。この大噴火は、多くの特攻隊関係施設等を埋没

し、消滅させたそうである。この直後からデイソン氏は記念碑の再建について、市観光局の説得を開始した。この間、二〇一航空隊等、日本からの熱心な慰霊団体の参拝や募金の後押しもあって、市の再建協力を得ることができた。そして2000年、今度は鳥居やカミカゼ像と壁からなる記念碑(カミカゼ神社とも呼称されている)が建設された。マバラカット市が飛行士の像まで作ったことに、当時非難が浴びせられたようであったが、この像を見て驚いた。この特攻隊員の顔がとても厳しく、かつ崇高に見えたのである。デイソン氏は、特攻隊員は他の兵隊達と顔付きが全く違っていたので、直ぐ

判った、と話していたが、日本国内での特攻隊員の凛々しい中にも柔和な(悟ったような)顔とは違った悲壮感漂う印象を受けた。ただ、現地で見ただけなのであるのか、自分でも不思議に思えた。ここでも市の主催で子供たちを集め、日比合同の慰霊祭が行われた。

### ○特攻隊記念碑見学

(クラーク西飛行場跡)

1991年、東飛行場跡地に建設された初代の特攻隊出撃記念碑が、ピナツボ火山の大噴火によって埋没し、その上にカミカゼ神社が建設され、また米軍もクラーク基地から撤退した。デイソン氏は、今度は特攻隊が最初に

マバラカットの街中に、大地主のフェルナンド・G・サントス氏の邸宅があった。一時、第二〇一航空隊司令部として、また特攻隊員の宿舎として使用された建物だそうだが、改築等により当時の面影は薄れてしまったそうだ。外壁にこの家の歴史的価値について書かれた看板があった。ここで初めて大西司令官が20数名の敷島隊以下特別攻撃隊の編成を指示した歴史的な場所であったと聞くと、やはり肅然とした気持ちになる。事前通知なしに突然訪問したにも拘わらず、サントス氏は子供の頃垣間見た特攻隊員のことについて熱心に話してくれた。当時特攻隊員は、特別な兵士であったことが、子供心にも分かったそうである。

### ○大西軍司令部跡地見学

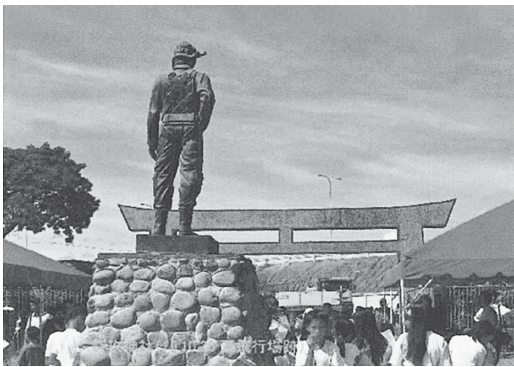
(バンバン地区)

西飛行場跡地にクラーク市の協力を得て、前とほぼ同じ壁形式の記念碑(二代目)を2004年に建設した。記念碑には「第二次世界大戦に於いて日本神風特別攻撃隊が最初に飛び立った飛行場」と記されている。デイソン氏の努力がなければ、我々が現地で整齐と慰霊祭を行うことなど難しかったであろう。氏の特攻隊に対する深い思い入れと情熱について改めて感動した(後述)。

### ○二〇一航空隊司令部使用住居見学

(マバラカット)

ここは、地上戦に移行する前、飛行場に隣接した丘陵地帯に設けられた第一航空艦隊司令部跡で、隣に掩体壕があった。大西神社として碑があったが、綺麗に清掃されていた。ガイドから掩体壕案内の女性にチップを上げてと言われて納得した。周りは草ぼうぼうだったから、こういう人も必要かなと思った。大西中將については、地上戦移行直前に台湾に移動したことや特攻



特攻隊慰霊碑 (クラーク東飛行場跡)

隊編成についての独断的行動等により批判があると言われるが、立派な慰霊碑や最後の見事な自決を思うと、現場にいなかった我々には、何とも判断致し兼ねるものである。

○ディソン氏宅表敬訪問

(アンヘレス)

特攻隊の行動を高く評価し、顕彰して、その意志を後世に残そうとしているダニエル・H・ディソン氏宅は、高級住宅地にあった。瀟洒な作りの家で、部屋の一部に自ら収集した特攻関係資料を展示した「カミカゼ博物館」が設けられてあった。

氏は温和な紳士であったが、特攻隊



大西中将碑 (第1航空艦隊司令部跡)

については情熱を持って色々興味深い話を、自ら描いた絵で説明して下さい。敷島隊メンバーの写真と行動、特攻隊員の服装や拳銃等の装備、坂井三郎氏との対談内容、大統領から勲章を受けた米軍殉職パイロットの話、屋外での機銃や特攻機エンジン等についての説明は、特に懇切丁寧にして頂き印象に残った。こういう方がフィリピンの慰霊碑や慰霊祭を支えて下さっているのだな、との思いを持つと同時に、このような方がいなくなった時、特攻隊の精神は、形骸化するのではないか、との危惧が脳裏をかすめた。日本人で、関係者以外にこれ程特攻隊に熱中する人がいるであろうか。



ディソン氏宅にて右より深山理事、ディソン氏、筆者

帰国後、菅原理事長からディソン氏著『フィリピン少年が見たカミカゼ』という本が、「桜の花出版株式会社」から平成19年10月に発刊された(別掲本号「図書紹介」欄参照)ということを知り、「フィリピン人と特攻隊」についての疑問点を明らかにすべく、早速入手した。この本にはディソン氏の歴史観、戦争観、特攻隊への思い等全てが記述されており、私の疑問はほぼ解決したと言っても過言ではない。先ずは、特攻協会関係者には是非一読をお薦めしたい。

同氏は、歴史は公平に見なければいけないと、フィリピンにおける戦争についての体験に基づいて、日米の良い点、悪い点を具体的に記述しており、我々には頭の痛い点もあるが、概ね日本に好意的に記述されている。特に、「カミカゼ」については、興味本位ではなく、何故日本人がこのような行動を取るものが出来たのか、何故この精神が今必要なのか等々、日本の歴史も研究し、日本人以上に特攻精神について思索・研究の結果、結論を出したものであり、「もし、カミカゼの飛行士達がたった一つでも、一般のフィリピン人に対して残酷な行為をやったという証拠が出てきたら、直ちに私はカミカゼの記念碑を引き倒します」とまで

言い切つて、特攻隊員に対する絶対的とまで言える信頼と尊敬の心情を吐露しておられる。

特攻隊に対する結論的評価は「カミカゼは白人に対する最後の猛烈な抗議だった」としており、「カミカゼの精神は、自らのアイデンティティー、自らの名誉や文化を守るために、自らの命を引き替えにすることで、人は到達することが出来るのだ、ということを示しているのです」と言い、「カミカゼ精神とはアジア人が到達しうる究極のものである」と断定している。

特攻隊により、フィリピンにおいて図らずも大東亜共栄圏思想の小さな花が開いた感じがする。私はこの本で、フィリピン人と特攻ということについて、大いに啓発され、考え方を見直したのであった。

○刑死殉職者慰霊碑参拝

(モンテナルパ)

戦後日本軍の戦犯が収容されて17名が処刑され、埋葬された地に「モンテナルパ日本人記念墓地公園」があった。慰霊碑のある場所は手入れが行き届いて綺麗であった。無念の思いで刑死された方のご冥福を祈った。死刑を執行したマンゴーの木を見たかったが、昨年枯れて切り倒されてしまったよう

だ。

昭和26年1月、突然死刑囚の処刑が執行され、14名が異国の露と消えた。しかし、内6名は完全に無実であることが、後日証明されているという。報復裁判の無情な結果であった。

その後、その他の戦犯は大統領恩赦で帰国できたが、戦争の悲劇の一つの証拠である。戦争にはこういう不条理なことが行われるということを忘れないためにも、特攻隊とは直接関係なくとも、ここは是非訪問すべき場所であると思う。

横道に逸れるが、実は、渡辺はま子の大ヒット曲「ああモンテンルパの夜

### 秋水の試験飛行成らず

河辺 勇

昭和19年10月14日、関行男大尉以下、中野磐雄、谷暢夫一飛曹、永峯肇飛長、大黒繁男上飛の零戦5機は、セブ島からルソン島クラークへ移動した。その際私も3番機の谷一飛曹の座席の後ろに乗り込んで移動した。そして、その数日後に、突然私は内地への帰還命令を受けて、蜻蛉返りする一式陸攻に乗り込み、201空の搭



日本人戦犯刑死者墓地 (モンテンルパ)

はふけて」の歌は、恥ずかしながら今まで何となく聞いていた。が、現地を訪れて、帰国後その背景や事実を調べ、初めてこの歌の持つ意味や敗戦の悲哀を実感した。また、改めてこの日本人死刑囚が作詞・作曲した歌を聴いてみて、本当に良い歌で、キリノ大統領の琴線に触れて心を動かし、日本人全受刑囚の日本送還と全死刑囚59名の無期への減刑に繋がったことも納得した。

更に、この裏には、加賀尾僧侶の献身的な行動があったこと等々・・・歌も背景や裏話を知らない、何気なく歌ったり聞くだけで終わってしまうものだなあ、と再認識させられた。背景

乗員と別れて帰国した。その直後に、関大尉以下5名は、第一神風特別攻撃隊敷島隊員となって、10月20日に西マバラカット飛行場から出撃したが、敵機動部隊を発見できずに帰投。その後、

10月25日、4回目に東マバラカット飛行場から出撃して、レイテ島沖に敵機動部隊を捕捉、敢然として全機突入。赫々たる戦果を上げて散華された。このようなことになるのは、当時思いもよらないことであった。

以下、試験飛行の状況を『異端の空：太平洋戦争日本軍用機秘録』（渡辺洋二著・文藝春秋発行）から引用する。

昭和19年10月14日、関行男大尉以下、中野磐雄、谷暢夫一飛曹、永峯肇飛長、大黒繁男上飛の零戦5機は、セブ島からルソン島クラークへ移動した。その際私も3番機の谷一飛曹の座席の後ろに乗り込んで移動した。そして、その数日後に、突然私は内地への帰還命令を受けて、蜻蛉返りする一式陸攻に乗り込み、201空の搭

10月25日、4回目に東マバラカット飛行場から出撃して、レイテ島沖に敵機動部隊を捕捉、敢然として全機突入。赫々たる戦果を上げて散華された。このようなことになるのは、当時思いもよらないことであった。

以下、試験飛行の状況を『異端の空：太平洋戦争日本軍用機秘録』（渡辺洋二著・文藝春秋発行）から引用する。

帰国して当時厚木にあった整備高等科で教育を受けて、秋水が完成するまでの間、昭和20年1月から岡崎近くの

7月5日夕刻、追浜飛行場で、エンジン試験を行い、7日に試験飛行が行われた。16時55分、私は離陸に備えて

「秋水」・太平洋戦争中に日本軍がドイツ空軍のメッサーシュミットMe 163の資料を基に開発を目指したロケット推進戦闘機である。正式名称は、19試局地戦闘機秋水丁8M（大日本帝国海軍）、キ―200（大日本帝国陸軍）。日独技術協力協定により、資料が潜水艦によって運ばれた。

◇ ◇ ◇

以上、たった2泊3日で見聞したことの所見です。事実と掛け離れた内容があるかも知れませんが、特攻隊精神の崇高さ、偉大さ、影響力の大きさ等について十分実感することができました。むしろ、残念なのは、それがフィリピンという外国で得たものであり、

本家本元の日本では、情性に流れて真剣に勉強していなかったことを思い知らされたことでもあります。大いに反省するとともに、更なる勉強をしなければと思った次第であります。

XY8「秋草」が、1944年12月26日に、海軍312航空隊の犬塚大尉によって、滑空試験飛行が行われた。テストは順調に回を重ねて、操舵感覚は良好、機体設計も問題なし、との評価を受けた。1945年1月8日にはエンジンと武装が外された状態で、実機と同状態の「秋水重滑空機」の試験飛行が、犬塚大尉によって行われた。

「動力飛行テスト」・設計資料を入手して約1年後の1945年7月7日海軍横須賀航空隊追浜飛行場で、秋水は初試験飛行を迎えた。

陸海軍共同開発とは言え、メーカーと共同でロケットエンジンを開発し、実験実施部隊を創設して作業を進めていた海軍が、陸軍に先んじて試験飛行を行うことになった。

当初は、4月12日に強度試験機「零号機」による試験飛行が検討されたが、ロケットエンジンが間に合わず、幾多の試行錯誤を経て、3分間の全力運転を達成して、初の試験飛行に漕ぎ着けた(飛行時間5分半、3分半で1万メートルまで上昇、B-29追跡狙撃に2分を費やして、橈着陸で帰投)。

神奈川県足柄山中の「空技廠山北実験場」から、横須賀市追浜の夏島に掘られた横穴格納庫内に運ばれたKR-10(特呂二号)は、実施部隊である

312空整備分隊長廣瀬行二大尉(海軍機関学校第52期)と彼の部下の上等下士官達によって、エンジンは秋水に組み込まれて整備された。

試験飛行当日、全面オレンジ色の試作機カラーで、垂直尾翼に白い縁取りの日の丸を描いた秋水は、格納庫内で、中野勇(注・筆者は当時中野姓)上整曹等によって作られた木製の台車に載せられて、飛行場に引き出され、台車から降りして車輪を装着、滑走路出発点まで押されて行つた。

14時に予定された発進は、エンジンがかからず、再整備のために遅れた。犬塚豊彦大尉(海軍兵学校70期)が、冬用飛行服の内側や襟に銀狐の毛皮を縫い付けた、秋水用飛行服を身に纏うまま整備完了を待った。関係者によれば、航空ならまだしも、初夏の地上でのその暑さは想像を絶したというが、犬塚大尉から整備の遅れを責める声は、最後までなかったという。

16時過ぎ整備終了。操縦席に乗り込んだ犬塚大尉に、エンジン設計者、特に持田勇吉設計課長が、それまでの大尉の誠意ある態度に感謝して握手を求めた。犬塚大尉は少し微笑んで持田課長の手を握つた。燃料甲液の引火誘爆を避けるため、秋水の胴体下滑走路に放水が行われ、エンジンが始動した。

機体尾部の噴射口から、圧縮液と衝撃波により「虎の尾」と呼ばれる縞模様が見え、左翼を持つ廣瀬大尉、右翼を持つ中野上整曹にもその衝撃が伝わった。

16時55分滑走開始。翼を持ったまま10メートルほど秋水と一緒に走って、廣瀬大尉と中野上整曹は手を離れた。滑走220メートルで離陸。離陸を確認した312空山下政雄飛行長が、合図の白旗を挙げた。高度10メートルで車輪投下。しかし、連動しているはずの尾輪が上がらず、直後に機体は急上昇に移り、地上で見上げる一同からは、一斉に歓声が上がった。

試験飛行成功か、と思われた瞬間、高度350メートルほどのところで、突然尾部から黒煙を吐き、パンパンと異音を発してエンジンが停止し、余力でなお150メートルほど上昇した。廣瀬大尉の指示により、東京湾には本牧辺りまで救助艇が配置されていたものの、大尉は機体を助けるために、不時着水を選んで右旋回して滑走路への帰投コースを取り始めた。

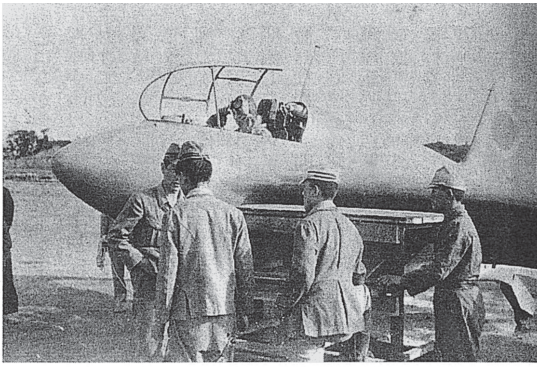
エンジン再起動が2回試みられたが駄目で、やがて甲液の非常投棄が始まった。しかし、燃料投棄はなかなか進まず、意外に早く高度が失われていった。残留甲液による爆発を懸念し

たのか、犬塚大尉は、大勢の見学者が見守る滑走路を避けて、脇の埋立地への不時着を目指した。それが第4旋回の遅れとなり、失速気味に滑走路手前の施設建物を超えようと機首を上げ、右翼端が監視塔に接触、そのまま飛行場に隣接する鷹取川で反跳し、飛行場西端に不時着大破した。

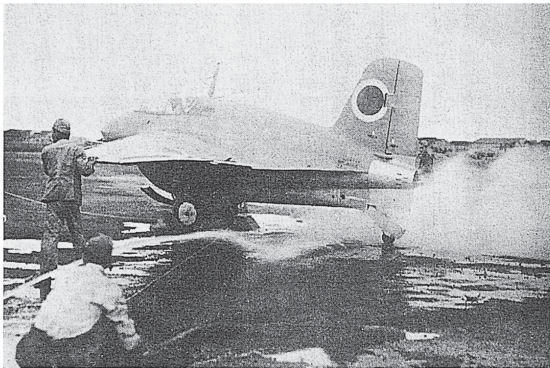
残留甲液による濛々たる白煙が発生したが、消防車による放水と同時に、整備分隊士工藤有範中尉が、犬塚大尉を操縦席から救出した。意識のあった犬塚大尉は、直ちに鉦切山の防空壕へ運ばれたが、頭蓋底骨折のため、翌未明絶命、殉職死された。

事故の原因は、燃料タンクの構造上の問題であった。秋水は発進後仰角を大きく取って急上昇する。しかし、燃料のエンジンへの取入口は、タンクの最前部下面に取り付けてあったのに、試験当時は、燃料を半分しか積み込まなかったため、急上昇の際に燃料液面が傾いて、エンジンへ燃料が流れなくなり、エンジン停止に至ったものと結論付けられた。

秋水の開発は、終戦の日まで続けられたが、再び試験飛行を行うことはなかった。生産2号機が、陸軍のキ-200として千葉県柏飛行場の飛行第70戦隊で初飛行を行うために、ロケッ



大塚大尉が「秋水」に搭乗。手前で話し合う整備関係者は左から隈元少佐、橋本中尉、奥野中尉。7月7日、発進まで少し間がある午後4時半ごろか。



発進直前の「秋水」。整備員が甲液の漏洩対策にホースの水で路面をぬらす。左翼端を持つのは廣瀬大尉。



昭和二十年七月七日 午後四時五十五分  
J8M1 局地戦闘機 秋水 離陸成功



三菱重工にて復元された「秋水」機上での河辺勇(旧姓中野)

トエンジンの到着を待っていたが、エンジンを搭載すれば飛行可能な状態のまままで、終戦を迎えるに至った。生産3号機も海軍でエンジン待ち、操縦は坂井三郎少尉が予定されていたが、実現せずに終わってしまった。終戦時、米軍に没収された秋水は3機であった。

最近、当協会に入会することになって、昭和16年1月に、呉海兵団に入隊してから終戦に至る4年有半の体験が次々と思い出されるようになってきた。それらの中で最も印象に残っている関行男大尉以下敷島隊五勇士と無念にも秋水の試験飛行に失敗して殉職

された大塚大尉に、会員の皆さんと共に改めて追悼の誠を捧げることを願って、二つの記事を投稿した次第です。

〔編注・筆者の軍歴〕

昭9・3 幼年工として三菱重工に入社

昭12・4 事務職、飛行機製造部門の進捗状況を一括掌握する部署の新設を提言、新設の進捗統計課員となる。

呉海兵団入隊  
宇佐空(工具部門)  
整備普通科を志願

昭16・1  
昭16・4  
昭18・5

昭18・12

普通科課程終了201空整備隊(トラック島)

昭19・3

サイパン島を経てペリリュー島

昭19・6

セブ島(零戦搭乗)

昭19・9・12

セブ基地米軍機による初空襲

昭19・10・14

関大尉以下5機ルソン島クラークへ移動の際、3番機谷機に同乗、5機の整備を一人で担当、数日後内地帰還命令を受ける。

明治空監督官  
三菱発動機監督官

昭20・1  
昭20・3

昭20・5・25

横須賀空、秋水整備

昭20・7・7

秋水試験飛行

終戦により行方不明者扱いで緊急復員。以来50余年無軍籍状態にあった。

図書紹介

ダニエル・H・ディソン著  
『フィリピン少年が見た  
カミカゼ』  
幼い心に刻まれた  
優しい日本人たち

著者のディソン氏は、昭和49年にルソン島マバラカット東飛行場跡に、神風特攻隊顕彰碑を建立した人物である。

戦後、歴史学を学び、米国のフィリピン統治の実態を知り、欧米諸国のアジア侵略が、大東亜戦争によって終止符が打たれたことを知ったが、昭和40年に、偶々双子の兄がマニラ街頭の古本屋で求めた、猪口力平・中島正共著の神風特別攻撃隊(英訳)を読んで、少年時代に目の当たりにした神風特別攻撃隊員のことを思い出し、アジアを解放した大東亜戦争の象徴である特攻隊の顕彰碑の建立を思い立ち、10年近い年月を費やして、碑の建立に漕ぎ着けた。本書は、氏が11〜15歳の間、居住していたアンヘレスとその周辺で展開された、比島作戦の様々な事件で、著者自身が体験したことを、少年の目線で記したものである。日・米両軍と比ゲリラについて、その実態を公正に捉えている。今までに全く報じられることのない

かった、戦場となった市井での色々な事件が、赤裸々に、淡々と、日本軍の善行と共に非行も、米・比ゲリラ軍の行状と対比して記されている。その過程で、日本が米・比とは異なった文化を持っていることを、肌身で感じ取るようになっていく。

勝ち戦から悲惨な負け戦に至る間が3章にわたっていて、更に6歳年下のエンリケッタ夫人の思い出にも、1章が割かれている。

10年近い顕彰碑建立に至るまでの過程が、氏の考え方と共にここまで詳らかにされたことも貴重な記録である。

最後に、日本が戦時中に提唱した、大東亜共栄圏構想は、今こそアジアはアジア人の手で、アジア並びに世界平和に貢献するために、実現されるべきであるとの提言で締め括られている。

本書は、一人でも多くの日本人に読まれることが望ましく、会員の皆様にも本書の一読をお薦めする次第であります。  
(菅原道配記)

発行所 桜の花出版株式会社

〒206-0011

東京都多摩市関戸1-1-10

TEL 042-371-9715

定価 1470円(税込み)

次に、出版社のご了承を得て、本書第八章「真の友情こそ私の願い」の一部を掲載させて頂いた。

「真の友情こそ私の願い」

○カミカゼはテロリストなどではない

ところで、カミカゼとイスラム教のテロとが同じと見られることがよくあります。

恐らく、イスラム教のテロリストは

日本の方法をまねたのでしょう。日本はそれを最初に用いたのです。

しかし、だからといって日本人のことをテロリストとは言えません。カミカゼは決してテロリストなどではありません。

多くのジャーナリスト達がテロリストとカミカゼを同じに見ていますが、それは大変な誤りです。

確かに、テロリストはカミカゼの方法をまねてはいますが、彼らは最初から民間人を狙っています。敵そのものを殺すのではなく、女性や子供を殺しているのです。それはカミカゼの哲学と完全に相反するものです。

私が日本の文化や哲学を学んでいった時、テロリストの行為は日本人に受け入れられるものではないことを知りました。特に侍達は、そのようなことを決して認めることはあ

シリーズ 日本人の誇り

フィリピン少年が見た  
幼い心に刻まれた優しい日本人たち  
カミカゼ

ダニエル・H・ディソン



ダニエル・H・ディソン  
Daniel H. Dixon

1930年フィリピン・マニラ市に生まれる。父ヴァンセン・ディソン氏は著名な芸術家。その後アンヘレス市に移る。11歳の時に第二次世界大戦(大東亜戦争)が勃発し日本軍の将兵と出逢う。戦後は高等学校に進学するが、フィリピン大学美術学部の奨学生試験に合格し入学。大学在学中に歴史学に興味を持ち、植民地時代以前のフィリピンの歴史を調べ始める。卒業後に旧日本軍の神風特別攻撃隊の事実を知り衝撃を受け、特攻隊と日本の歴史の研究に没頭。1974年に特攻隊史上初めて発見した地、マバラカットにその記念碑を建立。現在も歴史研究を続け、自宅に開設した「カミカゼ博物館」で地元の子供達に特攻隊の精神と意義を説いている。



少年時代、誇り高い日本軍人と楽しい時間を過ごしたフィリピン人著者が、その真実の姿と、崇高な精神について語った。「長い間フィリピンを植民地としてきたスペインやアメリカに比べれば、日本のフィリピン支配はほとんどないに等しいものでした。日本は、そのたった四年の間にカミカゼ精神をもたらしてくれました。それは、フィリピンにとって最良のものでした。」アジア孤高の精神カミカゼの心!

りませんでした。

侍達は、武器を持たない敵を殺すことを恥としました。

ですから、現代の侍であるカミカゼがイスラム教のテロリストと同じであるはずがありません。

私のカミカゼ博物館には、様々なジャーナリストが訪ねてきます。

そして、その多くが「カミカゼなどテロリストではないか」と考えています。ある通信社の記者は、何とか私にそう言わせようと、あの手この手を使って私を罠にはめようと思いました。

そして、「二十年もすれば、ニューヨークの世界貿易センタービルの跡地にアラブのテロリストの記念碑が建てられるのではないでしょうか」などと私に聞くのです。私はただ「ばかばかしい」としか答えませんでした。

また、違う話になりますが、私はトム・クルーズが主演した『ラスト・サムライ』という映画（編注・二〇〇三年に公開されたハリウッド映画）を見て感動し、文章を書いて新聞に投稿したところ、それが掲載されました。

その内容は、「何故、彼らを『ラスト・サムライ』と言うのか、本当のラスト・サムライは一九四四年にいたのだ。彼らは『カミカゼ』と言い、ここアンヘレスとマバラカットで結成されたので

ある。私は、誰かが彼らについての『ラスト・トゥルー・サムライ』という映画を作ってくれることを望む」というものでした。

### ○カミカゼは手段に過ぎない

——今こそ大東亜共栄圏の実現を

私は、フィリピン人は欧米の考え方に染まり過ぎてしまっていると思います。その状況には目に余るものがあります。もっと、アジアにおけるつながりがなければいけません。

フィリピン人は日本人、また中国人、マレーシア人達との関係をもっと作るべきです。

日本が戦争中に提唱していた「大東亜共栄圏」は、現在の平和な時にこそ実現されるべきものなのです。

この考えは戦争中に始まったものですが、戦争中であるが故に、その時に実現できるようなものではありませんでした。実際に日本がその思想の下で行ったのは、アジアの国々からより多くの原材料を日本に持っていくというところからでした。

それは、アジアの共栄ではなく、そのために、フィリピンや他のアジアの国々がそれを実際に受け入れることはありませんでした。ただ、それは戦時下だったからそうなってしまったのでした。

また、アメリカやイギリスなどによる破壊工作があったために、実現出来ないものでした。

しかし、今ならそのような破壊工作はありません。ですから、今こそ大東亜共栄圏が作れる時なのです。

戦争が終わったからといって、大東亜共栄圏の建設を止めてしまっただけではありません。そうではなく、その実現が可能な今こそ、その建設を続けていくべきなのです。

私のカミカゼ記念碑建設のための努力は、この大東亜共栄圏の実現にほんの少し貢献しようとするものだと考えています。

私は、大東亜共栄圏実現を、物質的なことについて進める前に心の部分から始めたのです。

というのは、お互いを尊敬し合い、それぞれの歴史と文化を尊重する真の友情こそが、大東亜共栄圏を実現するからです。

人々の中には、日本とフィリピンの間にあった戦争についてはもう語りたくないという人もいます。しかし、私にはカミカゼという戦争の時にあったことを平和の実現のために利用しているのです。

日本とフィリピンの間には戦争という歴史以外の関係はありませんでし

た。戦前の関係はほとんどないに等しいものでした。

両国の関係を戦争から始めなければならぬのなら、私達は戦争の中にならぬ高で、尊敬に値するものを見出さなければなりません。そして、それはカミカゼの哲学以外にはありません。

カミカゼを尊敬する人はフィリピンにも日本にもいます。ですから、そこから始めるべきなのです。

日本においても少し前までは、カミカゼについてかたることも避けられていましたが、現在の日本はカミカゼに対して敬意を払うようになりました。状況は変わりつつあります。

私の目標は大東亜共栄圏であり、それは「友情」なのです。戦争ではありません。カミカゼはそのための手段に過ぎません。

私は、友情を培っていくことこそが目的であるということに少しずつ気づいていきました。

この目的こそが、私を休ませることなく活動させてきたものなのでした。日本とフィリピンが戦争から始まった関係だったために、そこから始めようとしているだけなのです。

その行き着くところは友情であり、その他の何ものでもありません。



「特攻勇士之像」(第三体目)

宮城縣護國神社に奉納

理事長 菅原 道熙

平成19年9月初め、靖國神社で開催された全国護國神社会議の席上、宮城縣護國神社から「特攻勇士之像」を引き受けた、かつ、秋の大祭に間に合わせたい、との申し出があり、事は急転直下進行することになった。

そして、10月22日(月)11時から碑前において、約20名の氏子代表らが参列して奉納式が執り行われた。

先ず、田中於菟彦同社権宮司が齋主となつて神事が齋行され、修祓、一拝、献饌、祝詞奏上、撤饌、一拝、像の清祓と続いて神事は終了。その後、小職が奉納の言葉を述べ、田中光彦同社宮司が答礼の言葉を述べて、奉納式は滞りなく終了した。

翌23日、同社の秋季大祭が、11時から開始されるのに先立って、田中宮司と小職の二人で像の除幕を行った。

同社では、護國神社創立百周年事業として、平成16年に英靈顕彰館が、本殿に向かって右側に建設されていて、勇士之像は、英靈顕彰館正面入口に向かって右側の植え込みの中に建立されている。

その日、勇士之像は、除幕によって、絶好の秋晴れの陽光に燦然と映え、そのお姿を参列者の眼前に現された。

田中宮司は、勇士之像を、航空兵士と受け止められて、台座前の石盤には、

航空特別攻撃隊

航空特別攻撃隊は、帝国陸海軍が大東亜戦争末期の危急存亡のとき、己が生命をかえりみずに航空機に爆弾を抱き、敵艦船等に体当たりをし壊滅的打撃を与え、戦況を挽回すべく編成された部隊である。

隊などをを嚆矢とし、海軍とともに艦船攻撃を始め本土防衛の任にあたった。昭和二十年五月十一日第一五十一振武隊隊長・陸軍大尉荒木春雄命(当県出身)が知覧基地から沖縄方面へ出撃・散華された。

組織的な作戦では、昭和十九年十月フィリピン・レイテ沖海戦で海軍により初めて実施された。この神風特別攻撃隊は十月二十五日の出撃で大きな戦果を挙げ、当社御祭神の第一神風特別攻撃隊若桜隊指揮官・海軍少尉中瀬清久命が散華され、軍神と称えられた。また、昭和二十年四月三日神風特別攻撃隊第三銀河隊・海軍大尉河合達視命(元志波彦神社・塩釜神社宮司河合繁樹氏御子息)が宮崎基地から沖縄南方へ出撃・散華された。神風は特攻の代名詞となっている。

陸軍の特攻隊は、昭和十九年十一月フィリピンで大戦果を挙げた富嶽の一体である。

平成十九年十月二十三日

宮城縣護國神社

年7月10日、B-29の空襲によって灰燼に帰した。復興に至る経過を辿ってみると、

昭和20・8・4 三笠宮崇仁親王殿下御参拜

昭和20・8・24 終戦奉告祭

昭和20・9・15 秋保神社仮宮に遷座

昭和22・8・4 連合軍の命により「宮城神社」と改称

昭和23・11・23 戦後初のみたま祭

昭和25・3・4 復興委員会発足

昭和25・8・13 復興一期工事(元奉齋殿)建設着工

昭和27・2・19 青葉城本丸境内地域を国より買収

昭和27・10・22 戦後初の合祀祭齋行

昭和28・4・29 里宮浦安殿(元奉齋殿)建設着工、秋保仮宮より遷座

昭和29・2・13 復興第二期工事、伊勢神宮外宮別宮「風宮」旧正殿(第59回式年遷宮により建て替え)の、当社御本殿としての頒賜が決まり、地鎮祭齋行

昭和29・8・6 御木曳祭齋行

昭和32・9・9 社号を宮城縣護國神社と復称

昭和32・9・19 御本殿上棟祭齋行

昭和33・8・6 御本殿正遷座祭齋行

昭和35・11・9、38・6・4 復興第三期工事(宝殿、拝殿造営)竣工

昭42・7・31 復興最終工事(別宮「浦安殿」造営、奉斎殿移築等) 竣工  
以上の如く、戦災から四半世紀近くを経て、現在の護國神社の整備は完了した。初めに建てられた里宮浦安殿は、その後の工事によって、取り壊されて、現存していない。

第59回伊勢神宮式年遷宮の際に、外宮別宮「風宮」の旧正殿が頒賜されて、宮城縣護國神社の御本殿になっていることが特記事項である。

当社は、仙台市観光の目玉である、青葉城址天守台に在り、境内には、売店、食堂が軒を連ね、青葉城資料展示館が併設されている。英霊顕彰館は、ミニ遊就館で、中には数年掛かって製作されたという百分の一の戦艦大和、空母飛龍の模型が展示されていて、県出身戦没者の写真が壁面に飾られている。



宮城縣護國神社奉納特攻勇士像

◇ ガダルカナル、次いでビルマで敢闘、多くの戦没者を出した歩兵第4聯隊の戦友会が、永らく氏子の中心になっていたのが、今やその中心は、隊友会会員の手に委ねられつつあるように見受けられた。

◇ ◇ ◇  
これで、護國神社には、昨年4月の福井県、鹿児島県に続いて三休目が宮城県、近く四休目が愛媛県護國神社に奉納される運びになっている。もう一体は、世田谷山観音寺に納められ、昨年9月23日の年次法要に先立って、仏式による除幕式が行われた(会報「特攻」73号参照)。



除幕式場

◇ ◇ ◇  
大阪芸大の学生が中心となったボランティア団体「日本人の心を伝える会」の趣意に賛同して協会は、CD「あ、特攻」と特攻勇士のミニチュア像の製作頒布に携わることにして、CDは約四千枚、ミニチュア像は約百七十体が売れて、前記五箇所に「特攻勇士之像」をお納めすることが出来るようになりました。皆様方のご協力に対して、心から感謝申し上げます。

◇ ◇ ◇  
これ以上の奉納を可能にするためには、更なるCDとミニチュア像の売上げが必要でありますので、未だ御購入頂いていない方には、この際、是非お



除幕後の神官と筆者

求め頂きたく、お願い申し上げます。

既に御購入頂いている方には、改めて身内や知人の方々に、この運動の趣意をお伝え頂いて、引き続き「特攻勇士之像」鑄造資金の蓄積に御協力を賜りたく、お願い申し上げます。

そして、一体でも多く「特攻勇士之像」が、各地の護國神社に奉納されて、日本人の心を後世の国民に想起させるようになりますことを、衷心より希望する次第であります。

購入御希望の方は、左記当協会事務局に、葉書、電話又はFAXでお申し込み下さい。現品に郵便振替用紙を同封してお送り申し上げます。

記

〒105-0001

東京都港区虎ノ門3-6-8

第6森ビル5階

「財団法人特攻隊戦没者慰霊

平和祈念協会事務局」

TEL03-5405-1838

FAX03-5405-1839

なお、4月7日以降は、次の新事務所へ移転しますので、お間違いないように願います。

〒105-0014

東京都港区芝2-5-19

ATビル 4階

ATビル 4階

# お知らせ

理事長 菅原 道熙

## 一 『特別攻撃隊全史』(第一部 特別攻撃隊五訂版、第二部 準特攻戦没者名簿)の刊行について

### 1 刊行に至る経緯

平成16年末の理事会で、平成17年から『特別攻撃隊』五訂版の刊行作業を開始することが決定されました。平成19年中の刊行を目指しましたが、予想以上に訂正、追加事項が多く、慎重に作業を進め、予定より1年遅れて本年3月29日の総会当日に刊行される予定になっております。

作業開始と同じ頃に、映画「男たちの大和」が上映されて、全国的に関心が高まりましたが、それよりずっと早く、大和特攻という言葉は、世上では定着していました。このような情勢下で『特別攻撃隊』は、平成2年に刊行されて、平成15年に第四版が刊行されるまで、大和以下第二艦隊沖繩出撃時の状況と戦没者については、全く触れることなく推移してきました(ただし、第四版から第三部 顕彰譜389頁に、「戦艦大和以下特攻艦隊の碑」が

追加されました)。

平成18年3月の理事会で、五訂版には第二艦隊沖繩出撃時の戦没者のほか、搭載回天と共に未帰還となった母艦潜水艦搭乗員や、任地展開中に乗船の海没、あるいは乗艇の喪失により、地上戦に参加を余儀なくされた戦没者等、特攻作戦に関連した戦没者を、「準特攻戦没者」として、その名簿を追加記載することにして、書名を『特別攻撃隊全史』と変更することに決定いたしました(会報第67号・57頁)。その考え方については、会報第69号・58頁に記載してありますので、再読をお願い申し上げます。

当初は、『特別攻撃隊(五訂版・追補版)』としていましたが、前記のように改め、また、「準特攻」としていたのを正字の「準特攻」に改めました。

### 2 『特別攻撃隊全史』(第一部 特別攻撃隊五訂版)の主要改訂点

- ア 写真説明 二箇所
- イ 記事追加 二箇所
- ウ 写真差し替え 一箇所
- エ 名簿空欄補充等 約千箇所
- オ 顕彰譜

a 高空空慰霊碑 追加

b マバラカット慰霊碑

写真追加・差し替え各一

説明文全面書き改め

c セブ観音 写真差し替え

d 特攻平和観音堂

説明文追加

e 合併による所在地区表示変更

### 3 『特別攻撃隊全史』(第二部 準特攻戦没者名簿)

- ア 第二艦隊 三、七五一名
- イ 回天 一、〇八三名
- ウ 震洋 一、四四六名
- エ 陸軍航空 一七七名
- オ 海上挺進 一、五七三名
- カ 空挺 一〇〇名
- キ その他 三四名

(終戦時自決、神州不滅特攻隊、大分702空)

計 八、一六四名

以上が『特別攻撃隊全史』の概要であります。靖國神社の「特攻勇士之像」の副碑には、特攻戦没者数は、陸海軍合計五、八四三名と刻まれています。

後世の人々が、本書によって、我が

国が大東亜戦争末期に、起死回生を図った特攻作戦の全貌を、より正しく把握して、我が国に古来培われてきた伝統精神を見直し、これから益々複雑さを増す国際情勢下に、我が国が毅然として、独立国家としての矜持を堅持しつつ、如何にして生き抜いて行くか

を考える、よすがとなることを心から願って止みません。

### 二 事務所の移転について

当協会の事務所は、創立当初から第6森ビルに置かれてきましたが、当ビルが現在の耐震基準に合わなくなって近く取り壊されることになり、家主の森ビル株式会社から立ち退きの要請がありました。よって当事務所は左記へ移転し、4月7日から新事務所業務を開始することになりました。

記

〒105-0014

東京都港区芝2-5-19

ATビル 4階

なお、新しい電話番号とFAX番号はまだ決まっておりません。会報75号でお知らせすることになりますが、移転後1年間は、現在の番号に掛けると、自動的に移転先の番号をお知らせすることになっていきますので、混乱は生じないものと思われれます。

現在の事務所は、森ビル株式会社の先代の森泰吉郎社長のお計らいによって、水道光熱費等を含めた管理費のみの支払いで入居することができました。今日に至るまでの森ビル株式会社のご厚意に対し、深甚の謝意を表するものであります。

### 平成19年第2回理事会・

### 評議員会報告(平成19年12月

6日開催) 理事長

議決された平成20年の事業方針には、財団設立以来変わっていない(1)会員の拡充と財政基盤の確立(2)各種慰霊事業の実施と支援(3)特攻隊の史実研究、調査及び資料の収集整備に加え、4項目目に「平成24年末までに新公益法人へ移行する。」が加えられました。この背景についてご説明申し上げます。

平成18年6月に公益法人改革三法が公布され、今年12月1日に施行されます(移行期間は5年)。現在協会は、厚生労働省所管になっていきます。新公益法人として認可されるまでこの形が続きます、認可後は総理府所管に変わります。厚生労働省からの説明によると、現在決定していることは、12月1日に施行され、同日から認可申請受付が始まることだけであり(19年末現在)、委細は内閣府から通知が入り次第連絡するという状態であります。

何回か関係団体が主催する講習会があつて、法改正の狙いは、理事会の独走を抑えるために、評議員会の性格を変えて、会の運営方針と理事任命権は評議員会に属し、理事会は方針の執行に当たる(理事会は評議員の任命権を

持たない)ということでありませう。

平成25年11月30日までに認可されないことになりませう。提出書類の修正を求められることは、大いに有り得ると考えられますので、平成21年中に認可申請ができることを目標に、検討と準備を進めます。

次に、昨年9月4日に瀬島名誉会長が亡くなられ、理事が1名欠員となつていましたが、評議員会で次の方が新たに選任されました。

ひとり玉砕の島を行く(文芸春秋社(平成19・5刊行)の著者)

新聞の書評にも取り上げられ、読まれた方も多いと思われませうが、一読されることをお薦め致します。

次に、実施事業についてであります。が、恒常的である(1)慰霊祭、年次法要の実施、(2)国内外各地の特攻隊慰霊顕彰事業への協力、(3)会誌「特攻」の発行、(4)会員入会促進の他、『特別攻撃隊全史』の刊行と「特攻勇士之像」の奉納が挙げられます。その内容については、本号に掲載されている「お知らせ」と「宮城県護国神社への奉納」記事に詳述しておりますので、それらによってご承知下さい。

### 事務局からの報告等

#### 寄附者御芳名(敬称略)

(平成19年10月1日～12月31日)

(単位千円)

二 大穂 利武 一 土田 八也

#### 新入会員名簿(敬称略)

(平成19年10月1日～12月31日)

- 茨城県 小泉敬三郎
- 千葉県 池田 守
- 東京都 赤羽 潤
- 東京都 内場 祐子
- 神奈川県 倉形 桃代
- 大沢 茂
- 寺崎 勝人
- 平吉 一則
- 柳瀬 芳巳
- 福岡県 弓削 欣也

- 寺田 利邦(19・8・31)
- 藤澤 信雄( )
- 岩崎 康彦(19・3・26)
- 千里久民男(19・9・18)
- 名波 敏和(19・9・18)
- 星 好次(19・8・30)
- 西嶋 與正(18・4・17)
- 小林 俊樹(19・10・2)
- 京都府 上田 三郎(19・5)
- 大阪府 川嶋 里美(18・10・20)
- 和歌山県 亀山 利雄(19・2・26)
- 山口県 中田 俊夫(19・9・16)
- 福岡県 松永 義時(19・3)

#### 会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

- 岩手県 佐々木綾雄(19・19・22)
- 宮城県 高濱 創(18・5)
- 福島県 本間 忠(19・4)
- 山形県 工藤三九郎(19・9・12)
- 埼玉県 島田 恵治(19・8・6)
- 千葉県 吉川 勇(19・7・8)
- 東京都 折口 龍三(19・7・4)
- 佐藤 公貞(18・1・3)

#### 会報「特攻」第72号及び第73号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。(訂正箇所)

- 第72号 14頁 2段目2行～3行目 誤 「九月中旬」
- 第73号 正 「十月十二日～十四日」
- 27頁 2段目30行～3段目1行目 誤 「10日には31戦隊の3機が、」 抹消
- 27頁 3段目2行目 誤 「72戦隊・19戦隊」
- 27頁 正 「72戦隊・73戦隊・19戦隊」
- 27頁 誤 「3段目7行目」
- 27頁 正 「1月マニラ発」
- 27頁 誤 「1月7日マニラ発」